

史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇九年 第五八号

伊能忠敬研究会

原図(縦型)の左下隅にあたる。彩色部分の少ない議会図書館大図のなかで、黄色く着色された広大な塩田が目を惹く。

湾奥は三田尻、東・西佐波令、宮市などで、一帯は現在の防府市域である。四方に展開している測線は、第五次測量の文化三年(一八〇六)四月、第七次測量の文化六年十二月、第八次測量の文化十年(一八一三)十月に順次測量された。第八次(九州第二回)測量の往路、文化九年一月には無測で通過している。

三田尻は毛利藩御船手組の根拠地、藩の公邸も置かれた要地で、米・塩などの積出港としても重要であった。古くから製塩が行われたが、元禄二年(一六九九)の古浜以来、中浜・鶴浜・大浜・江泊浜、西浦浜の「三田尻六ヶ所浜」が次々に築造され、入浜式製塩を行った。播州赤穂に次ぐ大生産地で、北前船で日本海岸各地に出荷され、藩の収入源となった。入浜式とは潮の大きな干満差を利用して、海水を自動的に塩浜に導入するもので、人力で揚げる揚浜式より大規模な生産ができる。今は工業用地に変わったが、一角に「三田尻塩田記念産業公園」があり、往時の諸施設が再現されている。防府市の名は周防国の国府に由来する。地図上の惣社、国分寺、国衙村などの記載がそのいわれを物語る。国分寺の西には天満宮がある。菅原道真の死の翌年、延喜四年(九〇四)に建立された日本最初の日満宮という。太宰府天満宮は延喜五年創建である。「天満宮殿回廊大に壮麗なり」(測量日記)。宮市は天満宮の門前町で、測量日記では、東・西佐波令の枝村であり、東が四分、西が六分と説明されている。文化六・九・十年と都合三回止宿した宮市の本陣兄部盤右衛門家は鎌倉時代から続く旧家・豪商で、江戸時代初期から本陣に定められた。鈴木純子(題字は伊能忠敬の筆跡)

目次

58号

巻頭

史跡探訪8「浅草天文台跡」

話題Ⅰ

『大日本沿海実測録』

伊能図巡回フロア展 in さいたま

話題Ⅱ

伊能忠敬と金沢八景

『浦島測量之図』描かれた風景判明

伊能大図総覧の地名と景観(十二)

浅草天文台・表彰状をいただいて

浮島が原自然公園を訪ねて

酒造家伊能三郎右衛門

芳名録―番外編 伊能ヒサ

研究ノート

伊能忠敬研究(八) 忠敬の見た風景

柏木家文書(四)

梵天を立てた所は三十万から四十万箇所

名著『伊能忠敬』(二)

伊能塾講座

大野弥三郎の墓を訪ねて

九州・新潟支部便り

「献花のつどい」二つの地図展 in 九州

『わが故郷の忠敬測量物語』

忠敬談話室

お便りから 日々の話題 お知らせ

表紙図解説 鈴木純子

首藤 郁夫 一

編集部 二

編集部 四

大沼 晃 六

編集部 一五

星埜 由尚 一六

首藤 郁夫 二三

大沼 晃 二四

渡辺 一郎 二六

伊能 陽子 二八

石谷 春香 三〇

柏木 隆雄 四二

佐久間達夫 四八

前田 幸子 五五

鈴木 純子 六〇

石川・馬場 六二

垣見 壮一 六四

松宮・川上・井上・奥永・馬場 六五

編集部 七一



『測量日記』冒頭「閏四月十九日、朝五ツ前深川出立。上下六人、伊能勘解由、門倉早太、平山宗平、伊能秀蔵、下人佐原吉助、新に召かかえ候長助なり。此日朝より小雨屋後に止。深川八幡宮参詣。それより両国通り浅草司天台へ立寄、高橋先生にて御酒を給、荷物は直に深川より千住宿へ積送。」

史跡探訪8 浅草天文台（頒曆所御用屋敷）跡

◇所在地 東京都台東区浅草橋三丁目交差点付近 ◇概要 幕府の天文観測・測量・地誌編纂・曆作成頒布・洋書翻訳などを行った役所。司天台、曆局、頒曆屋敷などとも称され、天文方の役宅もここにあった。一七八二年に牛込から移転、明治二年（一八六九）廃止された。

江戸科学の拠点「浅草天文台」跡を訪ねて

案内人

東京都府中市在住

首藤郁夫

JR総武線「浅草橋」駅前の大通り（江戸通）を左にしばらく行くと蔵前橋通との交差点です。手前の左側に「浅草天文台」についての説明板がたててあります。

手元の「尾張屋清七版東都浅草絵図（一八六一年）」には、「須曆所御用屋敷」とあり、その肩のところに「天門ヤシキト云」と表示してありました。天文台は、三味線堀川と新堀川の合流点のところにありましたが、現況では埋め立てられております。また、天文台には象限儀と簡天儀が設置されている高さ一〇メートル程の築山が敷地の中央にあったのですが、この築山も平坦にならされています。したがって、正確なその位置がどこであったのかさらなる検討が必要と思われます。ところで、伊能忠敬の内弟子だった箱田良助（後に榎本家に養子として入籍）が三味線堀の組屋敷に居住していました。浅草天文台へは徒歩一〇分程のところで便利だったと考えられます。

私と伊能忠敬との関わりは、日本科学史学会関東支部で佐原の伊能忠敬旧宅を訪ねた時に遡ります。旧宅の土蔵が旧記念館となつて間もない頃でしたから随分昔のことで、伊能洋氏の御祖母「こう」様の説明も拝聴したはずですが、その後、佐原の公民館で講演会がありました。伊能敬氏がご出演予定でしたが、体調がすぐれず残念ながら御欠席、斎藤茂太氏とNHKの川上アナウンサーの対談を聞きました。それが機会となり入会しましたが、今も科学史と忠敬への興味は尽きません。

（すどう いくお・科学史学会関東支部長）

【二十三頁「天文台跡」「科学史学会表彰」も併せてお読みください。】

画像資料：神戸市立博物館蔵

『大日本沿海実測録』は『大日本沿海実測図』大・中・小図（最終上呈版伊能図）の付録として文政四年（一八二一）に地図と合わせて幕府に上呈された。紅葉山文庫旧蔵の上呈本『輿地実測録』は国立公文書館所蔵、首巻および一〜三巻の計十四巻と「地図接成便覧」（大図二一四枚の接合一覧図）一舗よりなる。明治三年（一八七〇）には大学南校（東京大学の前身）から、「図」（便覧）を除く十四巻（首+一三巻）が『大日本実測録』として木版刷りで刊行されている。印刷本の原本は旧福井藩松平家所蔵の写本で、誤脱が少なからずあるとされる（大谷亮吉著『伊能忠敬』）。

首巻には高橋景保識「大日本沿海実測全図序」、伊能忠敬識「大日本沿海実測全図序」および「大日本沿海実測全図凡例」、また測量と地図作成に従事した天文方役人および忠敬の弟子たちの氏名が収録されている。伊能忠敬識とする序、凡例は久保木清淵の草稿による。これらの内容は山谷著『伊能忠敬』、保柳睦美著『伊能忠敬の科学的業績』に活字化されている。沿海、街道、島嶼・湖水周廻の順に全測量コースの約七、八〇〇地点(地名)を収録、うち約五、五〇〇については隣接地との距離を記載、一、一二七地点については緯度を記載する(保柳睦美『伊能忠敬の科学的業績』)。距離記載のないものは遠測の島嶼や山などである。

印刷本の全文は国立国会図書館近代デジタルライブラリーで閲覧ができる。
(鈴木純子)

「大日本沿海実測図」とともに上呈さ

大日本沿海実測全図序

大凡使天下之形勢，晰然如示諸掌，莫明乎地圖。使幅員廣狹之量，遠近路程之度，歷歷可坐而數也。又莫詳乎地圖。而其明備詳悉，非有術以測量之，何以足辨毫釐乎？夫測量之為舉，非昇平之賜，不能而微其人，亦不能舉而行之。亘古之所難，而今亦不易也。吾邦地理

全圖自古未備，唯有長久保氏撰圖詳明可觀。然恨不原諸測量之術，毫釐無所辨耳。屬官伊能忠敬，夙好計算，夢寐不啻。臣先人之蒙徵而東也，忠敬即從學，益極其精。先人常患本邦地度之未有定測，嘗建白之。官時適開撫蝦夷，因使忠敬往馬達有沿海測量之命。從事積年，始知其確數。先人檢較之

洋書所載，果吻合矣。及聞以東之國，咸而先人不幸就木，景保謹陳其事於圖端。以上爾後幾二十年，歷艱險，凌波濤，實履測驗，所暨島嶼不遺。始能告成。於是撰修為大圖三十幅，中圖二幅，小圖一幅，附錄十四卷。嗚呼！斯圖上應天度，下盡地勢，明備詳悉，毫釐不差。而與天地永懸而不墜，於是乎昇平文

高橋景保識「大日本沿海実測全図序」

大日本沿海実測全図序

寬政十二年庚申夏，官以臣忠敬師高橋至時建白之故，使忠敬測定地度。會有開拓夷疆，撫循殊俗之舉，因連蝦夷而測之，則徑三百里而遠，地度可定矣。忠敬乃起程于江戶，應與州到蝦夷，細測其驛路里程及東沿海與極高度而還。其冬即撰定地上一度之數，并造

自江戶至三廐驛路程圖及蝦夷東南海邊里程圖，就至時而上之。明年有坂東海邊測量之命，自是連年有命。以測定東海北陸及與羽海邊文化元年甲子夏，以東國沿海測量已完，遂撰製地圖，連成至時既歿，因就其子景保而上之。九月六日，幕覽越十日，恩賜忠敬，釋褐給俸，重有西國沿海測量之命。命吏使副以測量所吏，於是益精儀器，窮極驗測。十年卒業，遂即撰製以為圖，與前所上者合而觀之。大凡六十八州之驛路沿海，至四周島嶼，無有遺漏。更取間官林藏所測，參補地圖，七更表葛而始成。名曰

大日本沿海実測全圖，共三通，都三十幅。又採錄里程與極高度，以作沿海

伊能忠敬識「大日本沿海実測全図序」

(右) 高橋景保識「測量ならびに地図作製に従事した天文方役人および忠敬の弟子たちの氏名」

『大日本沿海実測録』本文
画像資料：東京大学総合図書館蔵

文化元年甲子之冬有命，使測量所吏副之。市野茂喬，坂部惟道，下河邊与方，紫山正弼，青木勝雄，永井充彦，今泉直利，門谷常久，坂部弘道，及忠敬弟子尾形賢次，箱田真与，保木永譽，平野季恭，凡十有三人，皆與踏勘險而有功。其与此撰者更有川口春興，渡部慎，吉川景武，岡田道正，四人拮据之勞，歲月之

久，或死于後，或以病免，而合与方充彦，常久，春興，景武道正，及真與，永譽，季恭，相与戮力，以畢其功云。

高橋景保又識

伊能忠敬の全業績が埼玉に集結

「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in さいたま」

編集部

平成二一年一月六日から八日まで、さいたま市与野体育館で「完全復元伊能図全国巡回フロア展 in さいたま」が開催された。

このフロア展は、主催の埼玉新聞社の創刊六十五周年並びに伊能忠敬日本測量開始二一〇周年を記念する事業として伊能図フロア展さいたま実行委員会、埼玉土地家屋調査士会、(社) 埼玉県測量設計業協会の共催、伊能忠敬研究会の協力で実施された。

会場となった与野体育館はフロアいっぱい伊能大図のパネルが敷き詰められ、観覧者は外階段でいったん二階に上がり、ギャラリ―を通過して舞台袖からフロアに下りるように誘導された。ギャラリ―から地図を見下ろした観覧者は、「あつ、能登半島。石川県はあそこよ！」などと、お目当ての場所を指さして声を弾ませていた。

フロアでは自分が住んでいる町や故郷の地名を探して多くの方が地図の上を行き来した。さいたま市付近には常に観覧者が群がり、なかには「全然知らない人と地図を見ながら長時間話して盛り上がり楽しかった。」と嬉しそうに話す女性も。家族連れも多数来場した。映像コーナーでは「伊能忠敬」のビデオが放映され、用意された椅子席は常に満員。フロアの周囲に設置された説明パネルも人気で、説明役の渡辺名誉代表の話に傾いたり時には質問も交えつつ、一団となって移動しながら伊能測量の実際に聞き入っていた。

午後から体育館内の和室で開かれた星埜代表理事の講演会「さいたまの伊能測量」は映像を交えた講話で満員御礼の盛況だった。



上・さいたま市付近の地図に見入る人々
左・盛況だった星埜代表の講演会



「伊能忠敬と金沢八景」

大 沼 晃

江戸時代の中・後期を通して物見遊山の旅、今風に言えば観光旅行が盛んであった。江戸近郊の観光コースとしてグループで大山・江ノ島・鎌倉・金沢めぐりをする旅が定着し、その生き生きとした江戸の旅文化の情景が安藤広重等の浮世絵や名所記・道中記（例えば『江ノ嶋まうで浜のさゝ波』Ⅱ日本橋から江ノ島までの挿絵入道中記、天保四年（一八三三）刊行、里程・駅賃・宿賃・名所・名物・絵図入りⅡ現在の観光ガイドブックに相当）に描かれている。江戸後期の横浜はまだまだ鄙びた漁村であったが、しかしながら江ノ島・鎌倉は現代と変らぬ観光都市として多くの物見遊山の客を引き寄せた。

今回は、第二次測量日記（資料提供、佐久間達夫氏）を読み解きながら、品川宿から江ノ島までの足跡を辿り、訪れた先での様子や出来事を披露しながら観光地・金沢八景を取り上げてみた。

測量日記に基づき一行の足取りを辿る。

享和元年（一八〇一）

四月二日 富岡八幡宮参詣↓品川宿（送別酒宴）↓川崎止宿

三日 雨天につき川崎宿逗留（宿替え止宿）

四日 川崎宿↓東子安村↓西子安村↓神奈川宿↓保土ヶ谷宿止宿

五日 保土ヶ谷宿↓戸部村↓尾張屋新田↓吉田新田↓中村↓横浜村↓北方村↓本郷村止宿

【ここら辺でひと休憩】

吉田新田の工事は、江戸の本材木町に住んでいた吉田勘兵衛（石

材・木材商）が、今から三五〇年ほど前の明暦二年（一六五六）に幕府の許可を得て入海を埋め立てて、途中挫折しながら寛文七年（一六六七）に新田が完成。横浜市の中区と南区の一部を含む広さ約三五万坪（横浜スタジアム四四個分）で全体の五分の四が田んぼで、残りの五分の一角が畑や屋敷であったとのこと。

伊能忠敬一行は、完成してから一三〇余年経ってはいるが歩いた道を推測すると、現在のＪＲ京浜東北線の関内駅から石川町駅に向けて通る半地下式の高速度道路、当時そこは海であり、海と埋立地の境の一直線に伸びる潮除堤（しおよけつつみ）の上を横浜村に向けて、右手に農民の姿もまばらの田んぼを、左手に横浜の名前の由来と言われる横に長い砂浜を見ながら、歩を進めたのではなからうか。伊能図を見ると砂州の先端までは赤線が入っていないので実測せず、遠望した地形だけを絵図面に落とし込んだようだ。

六日 本郷村↓根岸村↓滝頭村（昼食）↓磯子村↓森村三ヶ村↓杉

田村↓富岡村止宿

七日 雨天につき富岡村逗留

八日 同村逗留

九日 富岡村↓小柴村↓寺前村↓洲崎村↓町屋村（五郎左衛門方で昼食）↓能見堂迄測量↓擲筆山地蔵院にて所々測量↓入海を通り赤井村↓宿村（小泉あり、地名・釜利谷）↓町屋村止宿

【ここら辺で、神奈川県立金沢文庫作成の金沢歴史地図を参照にしながら大休憩】

その一 伊能忠敬一行が訪れた五三年後（一八五四）の小柴沖に、ペリーは七隻の艦隊を率いて停泊し、江戸幕府の人々を驚愕させた。

前年の一八五三年に来航（所謂黒船来航のこと）したペリーは、再来

航に備えて抜け目無く小柴沖一帯を測量し、帰航している。(山地学芸員談話引用)

その二 中世時代の六浦(むつら)は、鎌倉に隣接した江戸湾の良港で、鎌倉の東の玄関口として、人・物・情報が行き交う港湾都市であった。北条(金沢氏)実時が館を金沢に移し、菩提寺である称名寺を建立したため領地がある房総から年貢米や建築資材等々を木更津湊や富津湊に集め、船で回漕し洲崎湊に陸揚げした。鎌倉内に住む武士や庶民向けの物資は六浦湊に陸揚げした。

しかしながら、北条氏が滅び鎌倉が衰退すると共に人口が激減し、湊の機能が変り始めた。江戸期には、その役目が品川沖に取って代わられた。

その三 金沢八景は、徳川光圀に招かれて明国から来日した心越禪師(しんえつぜんし)が、故郷杭州の西湖を思い出しながら詠んだ漢詩によつて有名になる。金沢八景の魅力は、海を基調とした自然の美しさに、人々の営みの跡を重ね合わせることによつて成り立っている。

(金沢歴史散歩より引用)

安藤広重の八景画には、多くの帆船が行き交う湊の賑わいや塩田・漁船・潮干狩りなど海と関りながら暮らす様子が描かれている。(二〇ページ掲載の浮世絵参照のこと)

伊能忠敬も能見堂まで登り、辺りを測量したと日記に明記している。また、当日の天気は晴れのち曇りと記している。浮世絵に描かれたとおりの自然美が溢れる箱庭のようなすばらしい光景を目にしているものと確信する。ただし、惜しむは「絶景かな、絶景かな」と記録に残していないのが残念だ。『武州金沢擲筆山地蔵院能見堂八景之画図』参照のこと)

その四 能見堂は、江戸期の寛文年間(一六六一〜一六七二)徳川綱

吉時代)に久世大和守広之(旗本・広宣の三男として慶長十四年生れ。秀忠・家光・家綱三代に仕え、若年寄・老中を経て下総関宿城五万石の大名になった久世家初代当主)が再興した擲筆山地蔵院のことで、かつては、ここから武州金沢の海が一望できた。(現在は、能見堂緑地として痕跡があるだけ)

しかしながら、入海の新田開発や明治以後の旧海軍施設、民間軍工場の建設(故に、写真撮影は厳禁で一切記録なし)および国道十六号線の拡幅、戦後高度成長期の住宅開発等々で入海や平潟湾のほとんどが埋め立てられ、その原風景は失われたのである。京浜急行はかつての入海を分断するように走っており、金沢文庫駅も海の中なのだ。

十日 町屋村↓野嶋測量↓泥亀新田↓瀬戸明神(三崎明神)↓六浦

↓三艘↓室木(昼食)↓浦郷村止宿(松平大和守陣屋あり、

ここより相模国三浦郡なり。)

【ここら辺でひと休憩】

その一 野島のエピソードとして、ペリー艦隊が小柴沖で測量していた時、一隻がボートを下ろし、水を貰いに数人が上陸したと、ある資料に残っているとのこと。接触した漁民たちの驚きはいかほどのものであっただろうか。(山地学芸員談話引用)

その二 瀬戸橋は海に架かる橋として日本最古の橋とのこと。北条実時の孫の貞顕(さだあき)が造営した。橋が架かるまで入海を西に迂回し、白山道(しろやまみち)を抜けて鎌倉幕府まで出仕したり物資を運んだりしたが、不便なので朝日奈切通しを開き六浦道を整備し幹線道路とした。

現在は、国道への出入りに欠かせない交通要衝の橋になっている。橋の周辺は釣り船屋が密集しており、休日には太公望でごったがえす。



神奈川県立金沢文庫「金沢歴史散歩」パンフレット『金沢歴史地図』より

金 沢 八 景

歌川広重画



称名晚鐘



瀬戸秋月



小泉夜雨



野島夕照



平潟落雁



洲崎晴嵐



内川暮雪



乙艦帰帆



武州金澤擲筆山地藏院能見堂八景之畫圖

その三 瀬戸神社は、別名瀬戸三島神社と呼ばれている。国道十六号線脇にあまりにも見事な神社があるので由来を調べると、治承四年（一一八〇）、源頼朝が伊豆で挙兵した際に、加護をもらった三島明神をこの地に勧請し、社殿を建立したそうだ。祭神は、主神が大山祇命、配祭神として須佐之男命。他十一柱。

その四 浦之郷は、三浦半島の東京湾側の付け根の部分に位置し、半島関門の地である。浦之郷陣屋は、寛文三年（一六六三）から、途中会津藩領期の十年間を除き、天保十四年（一八四三）に至る一七〇年間の酒井・松平両藩の相州飛地藩領支配の拠点で、浦之郷（横須賀市追浜）代官所があった。徳川氏が関東入国後、直轄地の年貢米を収納する倉を置き代官に支配させてきたが、酒井氏の領分となつてから、ここに陣屋（役所）を置いたとのこと。藤沢市・福原新一氏蔵の「相中留恩記略」に浦郷村の松平大和守陣屋風景画あり。

（逗子市史・通史編より引用）
十一日 浦郷村↓田浦持船越↓池ノ谷津↓田浦本村↓長浦村↓逸見村（昼食）↓横須賀村止宿

十二日 横須賀村↓深田村↓公田村↓大津村↓伊勢町↓走水村止宿
【ここら辺でひと休憩】
走水は、古東海道の水駅（すいえき 常時船四艘保有）で上総国府へ渡る海の道の玄関口であり、ヤマトタケル伝承の道として有名。

十三日 走水村↓鴨居村↓三軒家↓腰掛↓東浦賀↓西浦賀止宿

【ここら辺でひと休憩】
三浦半島に限れば伊能図で湊を表す「赤で帆船形」を印している所は浦賀と三崎だけである。徳川家康の領国となつてから、浦賀に代官頭として長谷川長綱を任命し陣屋を置いた。「昔、源頼朝卿の鎌倉に住

まわせたまう時、金沢・榎戸・浦賀とて三の湊・・・（廻国雜記）」と記された、鎌倉以来の良港であり、中世以来の軍事上の重要拠点でもある。家康は、この浦賀の地に三浦案針らに屋敷を持たせ、浦賀道を整備させ、海外貿易を盛んに行つたのである。

東浦賀および西浦賀とも浦賀奉行支配地で、湊は槍の穂先のように鋭く陸地に切り込んでおり水深も深く、周辺は小高い山に囲まれた良港であり現在も源家ゆかりの神社や咸臨丸出港の碑など当時の面影を多く残している。忠敬一行は、伊能図を見ると狭い海辺の町をぐるりと一回りしながら測量したと思われる。日記には、東浦は長九百間あり、西浦賀に番所あり、甚だ地狭にして奥行きなし。六、七間から十間に限る。当時浦賀奉行水野伯耆守と記述あり。

現在は、港の中ほどに東と西をつなぐ（全国でもめずらしい海の市道）渡船場があり、大人五〇円、五分ほどで簡単に渡れる。浦賀ドックが閉鎖・撤退してからペリー来航の町として町おこしに努めているが寂れる一方である。

十四日 西浦賀村↓久里浜村↓野比村↓長沢村↓津久井村↓上富田村止宿

十五日 上富田村↓菊名村↓金田村↓松輪村↓毘沙門村↓宮川村↓向ヶ嶋村↓三崎港止宿

十六日 三崎町↓城村↓二町谷村↓諸磯村↓網代村↓三戸村↓下宮田村止宿

【ここら辺でひと休憩】
三崎を拠点に対岸の城ヶ島を測量しようとしたが、役人から島には道がないし、舟行も不可と言われ、遠見遠測したとのこと。
現在は島を一周することができ散策路が完備されており、「雨が降



鎌倉繪圖

る降る 城ヶ島の磯に・・・」の詩で有名な島崎藤村の歌碑がある。

十七日 下宮田村↓和田村↓長井村↓林村↓大和田村↓長坂村↓佐島村止宿

十八日 雨天につき逗留

十九日 雨天につき逗留

二十日 佐島村↓芦名村↓秋谷村↓下山口村↓一色村↓堀内村↓小坪村止宿

【ここら辺でひと休憩】

小坪村（逗子市小坪）は、伊能図を見ると材木座村の間に赤い大丸点があり、鎌倉郡との郡界の小さな漁村であることが分かる。文化八年（一八一二）〜安政六年（一八五九）間の平均人口は約二千人弱。

当時は、イワシ漁が盛んであったらしいが、海岸に打ち寄せる海藻（モク）を拾い、近在の農民に田畑の肥料として売り払い相当の現金収入があったそうだ。

特筆する事項として、逗子市役所の玄関ホールの壁に谷文晁の絵（大きく拡大した陶板焼き風のレリーフ）「鑑摺演」を飾ってある。この絵は、谷文晁（江戸時代後期の日本の画家、文才家、和歌、漢詩、狂歌に秀でた人 一七六三〜一八四一）が寛政五年（一七九三）に老中松平定信に随行（配下の勘定奉行・久世丹後守広民、代官江川太郎左衛門ほか）し、相模・伊豆などの沿岸を巡った折に風景を描いた「公余探勝図」のひとつであり、小坪でもう一枚「久野谷村」を描いている。伊能忠敬はその二枚とも見ているかもしれない。原画は、東博所蔵。谷文晁のお墓は浅草源空寺。忠敬との縁が何かありそうな気がする。

二十一日 小坪村↓材木座村↓由井浜より鶴が岡八幡宮まで脚間（き

やくかん、歩間・歩測のこと）を以って測量↓無測量で参詣↓建長寺・円覚寺・大仏↓長谷村↓坂下村↓稲村ガ崎↓腰越村↓江ノ島止宿

【ここら辺でひと休憩】

日記を読み込んでみると推測ではあるが、測量隊は八幡宮に敬神の意で、間縄ではなく歩測で測量し（佐久間氏監修）、その足で物見遊山のために名所をぐるりと回遊しながら長谷の海辺まで出て、別働隊を合流したのではないだろうか。また、当初の予定では腰越で止宿することになっていたが、役人と交渉し江ノ島止宿になったことを大いに悦ぶと書いてある。決して仕事一筋の堅物人間ではないようで微笑ましい。

二十二日 江ノ島測量↓三弁天へ参詣↓止宿で昼食↓（以下略）茅ヶ崎村南郷止宿

【この辺でひと休憩】

三弁天とは、江ノ島には宗像三女神を祭っているのでその女神を指している。中世以降、弁才天信仰は神道と日本土着の水神である市杵島姫命（もしくは宗像三女神）や宇賀神と習合して、神社の祭神のひとつとして祀られることが多くなったとのこと。弁才天信仰が盛んな土地は、前五七号で取り上げた広沼・沼津周辺とのこと。

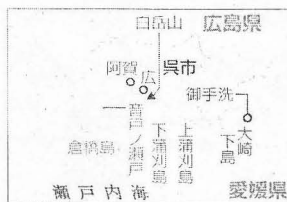
因みに、日本三大弁才天とは、①奈良県天川村・天河大弁財天、②滋賀県竹生島・宝厳寺、③広島県宮島・大願寺の三箇所。残念ながら歌舞伎の演目「白波五人男」でよく知られている弁天小僧菊之助の啖呵（知らざあ言つて聞かせやしよう）に出てくる江ノ島の弁天様は仲間入りをしていない。

（おおぬま あきら・マネー&キャリアマネジメントアドバイザー）

伊能忠敬の測量風景「浦島測量之図」



「浦島測量之図」(宮城県弘前市)の一部。右後方の象の背に似た山が白岳山。現在の呉市阿賀地区での測量風景を描いた場面と特定された。浜辺では「人足」たちが1列に並び、両端に立てられたぼんてんの間の距離を測っている



この調査結果について、伊能忠敬研究会の渡辺一郎名誉代表は「ほぼ間違いなく」と評価した上で、「これだけ周囲の地形が細かく描かれているということは、絵師が測量に同行し、実際の景色を見て描いた可能性が高い」と指摘。もう一つの絵図が、大崎下島(呉市)での測量風景を描いた「御手洗測量之図」であることを挙げ、「なぜ広島藩内だけに測量図が残されたのかを考えると、重要な手がかりになる」と大きな関心を寄せている。(片岡正人)

江戸後期の測量家、伊能忠敬(1745~1818年)の測量風景を描いたものとしては、全国で2点だけ現存している絵図のうちのひとつ「浦島測量之図」これに描かれた山々や集落が具体的にどこなのか、広島県呉市教委の井垣武久

の、広島県呉市教委の井垣武久主幹の調査で初めて特定された。

描かれた正確な地点判明

年3月に現在の呉市付近を測量した際の風景を描いたものであることは分かっていた。ただ、複数の場面が一つの画面に描かれており、具体的な測量地点は正確には特定できていなかった。

発見。これを基点として考えることで、周囲の山々や音戸ノ瀬戸、上浦刈島、下浦刈島などの瀬戸内海の島々を一つ一つ矛盾なく特定することができた。

この結果、三手に分かれた測量隊の所在地は、それぞれ右から現在の呉市の長浜地区から広島地区、阿賀地区、音戸地区であることが確認された。

井垣さんは、この絵図に描かれている象の背に似た特徴的な山が、呉市の広市民センターが所蔵している郷土の版画家・朝井清の「盛秋」(1923年頃)に描かれた白岳山と酷似していることを



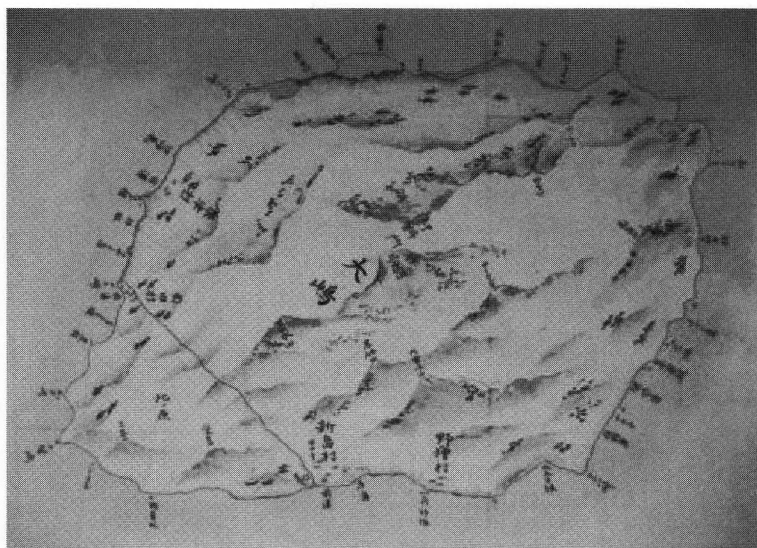
広市民センターで「浦島測量図」の風景を説明する井垣氏

入船山記念館蔵「浦島測量之図」に描かれた風景を具体的に特定

伊能忠敬の測量風景を描いた絵図は「浦島測量之図」「御手洗測量之図」の二点がいずれも広島県呉市内に現存しているが、その一つ「浦島測量図」に描かれた風景が、現在の呉市内の三ヶ所であることを呉市教育委員会の井垣主幹が特定した。井垣氏は昨年十一月、伊能研究会の有志による研修旅行の際に訪問した広市民センターでこの「測量図」に描かれた風景について詳細に解説された。絵図に描かれた特徴的な山の形を手掛かりに、具体的な測量地点を特定できたという。この調査結果について、渡辺名誉代表は「ほぼ間違いなくと思う」と述べている。

伊能大図総覧の地名と景観(十二)

星 埜 由 尚



第1図 大図102号 大島

伊豆七島

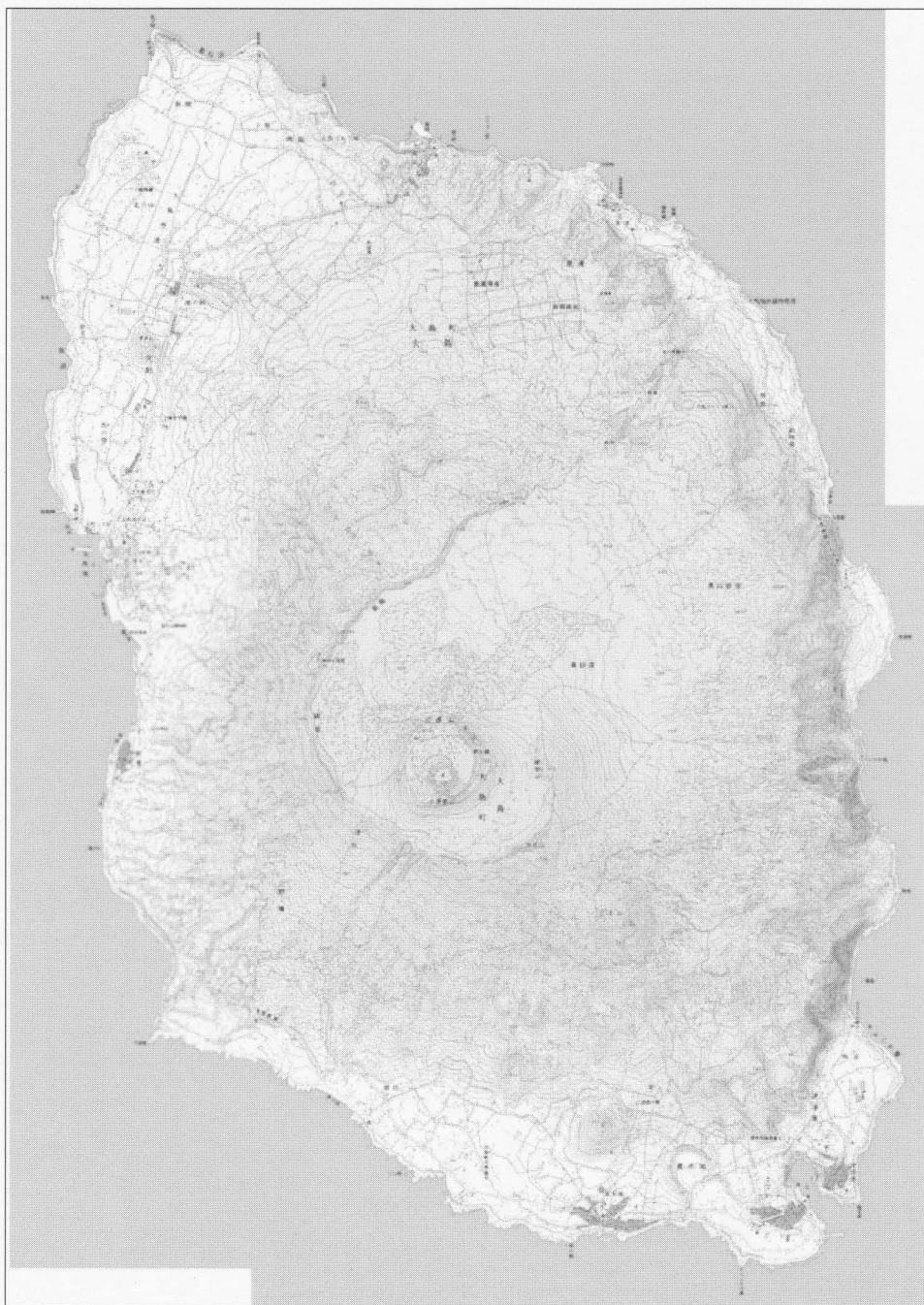
文化十二年五月一日、下田で風待ちのため長逗留した後伊豆七島へ向け出帆した。十一月一〇日に下田港に戻るまで漂流して三崎港へ戻るなど苦労の多い測量行であった。周知の通り、忠敬は高齢のため参加していない。

大島

大島では岡田村から反時計回りに島を測量している。岡田村と新島村を結ぶ横切り測線も設けられている。岡田村と新島村の間には大図に注記される北ノ原のほか、和泉ヶ原、中野原と言った草原が広がることが「測量日記」に記されている。北ノ原には現在大島空港ができている。大図に描かれる三峰山、愛宕山も地形図に見ることができる。

波浮湊は、「測量日記」によれば、瀬が続いて小舟しか入ることができなかつたが、平六という者が願い出て瀬を掘り抜き、深さ十三尋(約二〇m)、湊の入り口は一町(約一〇m)となり、舟の行き来も増え、平六から才六の代となり、財をなした。測量隊も才六の屋敷に宿泊している。地形図を見ると、波浮港は、古い火口の地形であることが判読できる。避難港としては、最良の港であつたであろう。

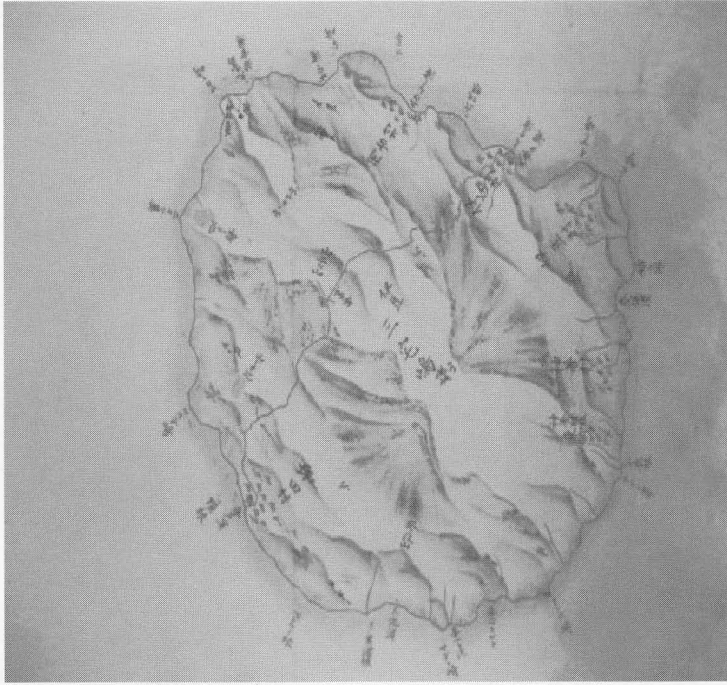
大島の川は、すべて黄色で描いた川である。大島は、火山島であるため、透水性の高い火山噴出物からできている。そのため、透水性が高く、地表水となつて流れることが少ない。即ち涸れ川となつていくことが多く、そのため、河川を黄色く描いているものと考えられる。火山ばかりでなく、扇状地の河川を同じように黄色く描いている例もほかに見られる。



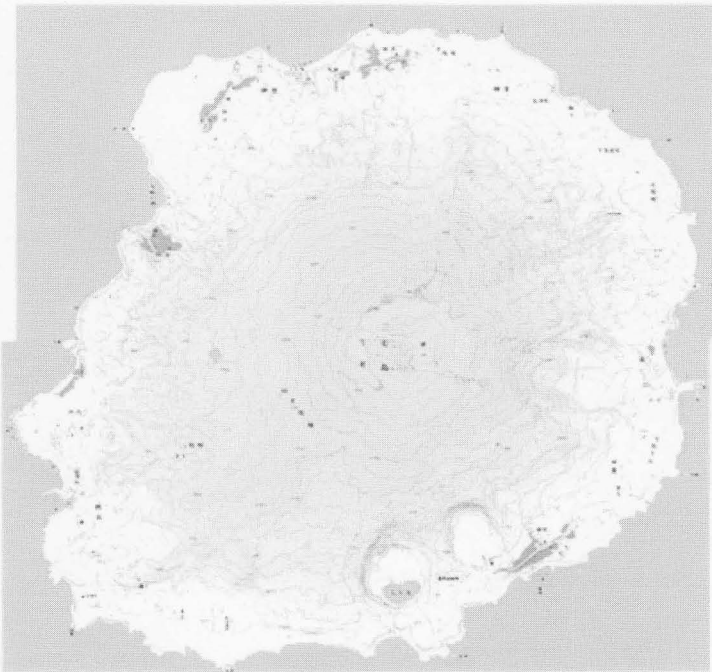
第2図 彩色地形図 大島

三宅島

文化十二年五月一八日下田から八丈島を目指して出帆したが、御蔵島から蘭灘波島を過ぎた辺りで逆風になり一九日に三宅島の伊谷村に上陸した。予定しない上陸であったが、伊谷村から神着村まで測量した。二日には八丈島に向かい、翌日八丈に上陸することができた。六月二九日八丈島を出帆したが、途中四日間漂流して三浦半島の三崎

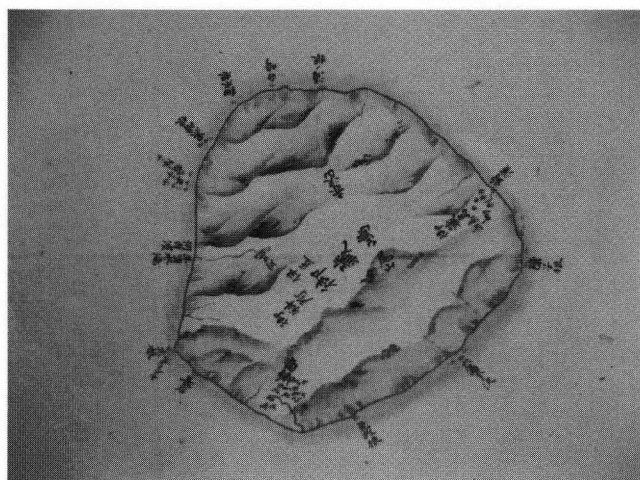


第3図 大図 104号 三宅島

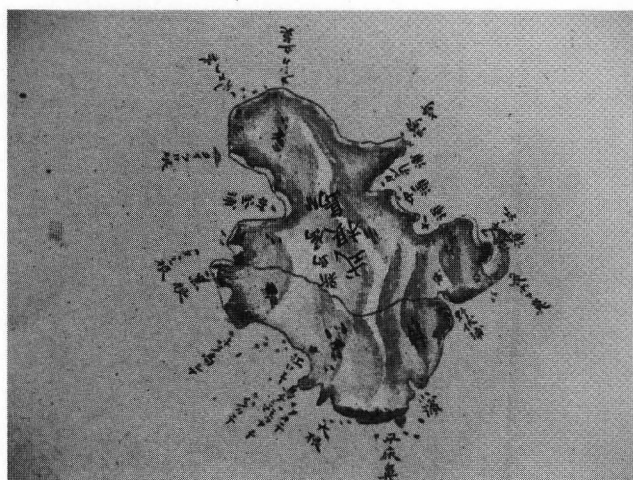


第4図 彩色地形図 三宅島

湊に着いてしまい、また風待ち滞留してようやく七月一日に三宅島伊谷村に上陸した。この間の苦労は、現代人の我々には想像もつかないであろう。「測量日記」には、一同無事祝着と書かれている。安堵するとともに喜びも大きかったのである。しかし、三宅島についた翌日、御蔵島に渡っているのに、三宅島には七月二日に戻り、翌日からようやく測量を始めている。神着村から時計回りに測量し、坪田



第5図 大図103号 御蔵島



第6図 大図103号 式根島

村と伊谷を結ぶ横切り測線も坪田村と伊谷村から桑ノ木平で閉合させている。式内社富賀明神、山ミヨ池、新ミヨ池、山二ツ山には、測線が分岐している。山二ツ山では、七島の島々の遠測を行っている。山二ツ山の辺りは、「測量日記」には焼原と記されており、大図でも山は茶色に彩色されている。溶岩の累々とした原野であったと思われる。山ミヨ池は地形図では大路池となり現存しているが、新ミヨ池は、新澤池跡となり消滅している。昭和五八年の三宅島噴火のなせる技である。昭和五八年と平成の今次の噴火により伊能測量当時とは地形が大きく変わってしまった。

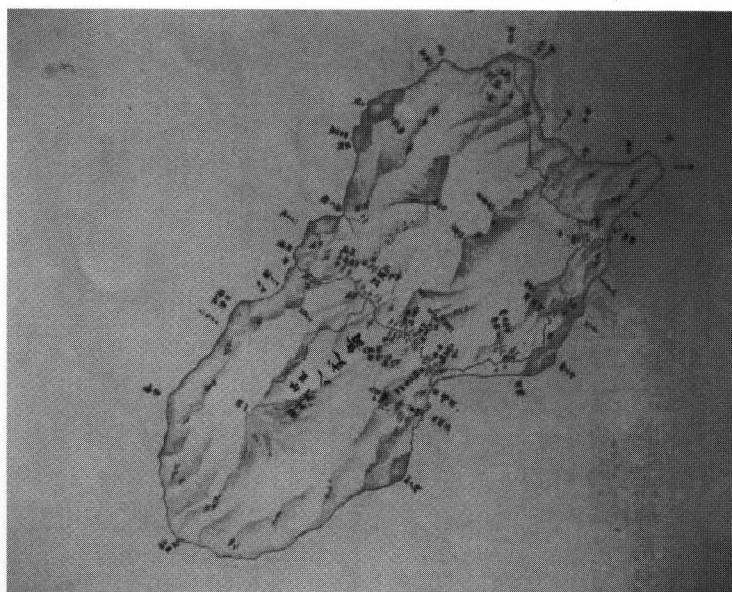
利島・新島・式根島・神津島・御蔵島

風待ちを繰り返しながら御蔵島、神津島、新島へと渡った。式根島は、当時人家はなく、新島から日帰りで三回にわたって測量している。利島は小さな島であるが、人家もあり新島から渡っている。御蔵島は険阻な島で上陸時、出帆時には、村人が総出で海岸の岩場をならし、舟を引き上げ、舟を押し出した。誠に前代未聞の難島であると「測量日記」には書かれている。御蔵島には、本村と南郷の二つの集落があり、南郷には出作小屋四軒があり、総数二八軒で南郷は、害虫や湿気が多いと記されている。御蔵島は、周囲を断崖絶壁に囲まれた軍艦のような島で、現在でも船の欠航が多い。このような島の海岸線を測量

することは言語に絶するようなことだったと見え、梯子や下げ縄などを用いて絶壁を上り下りしていることが「測量日記」には触れられている。

八丈島

五月二二日八丈島に上陸し、六月二九日八丈島を出帆するまで約一ヶ月の間八丈島を測量した。「測量日記」によれば、舟から八丈島を遠望してから煙を上げ、ホラ貝を吹いて島の人々に知らせ、迎えの舟に引いてもらって湊に入った。三根村の神浦(大図には神と書かれている)に上陸したが、岩石が多く舟掛の場所もないため舟を海岸に引き上げておか



第7図 大図 105号 八丈島

なければならなかった。地形図を見ると、神湊の付近の海岸は岩石海岸で、現在は、彫り込んだ港となっている。大賀郷に陣屋があり、陣屋に宿泊した。

「測量日記」には、大賀郷について家数二三九軒、流人小屋七軒、寺院二軒、流罪人家一六軒と書かれている。寺院は、肉食妻帯であるとも書かれている。御舟置き場には御舟六〇〇石積二艘と書かれ、幕

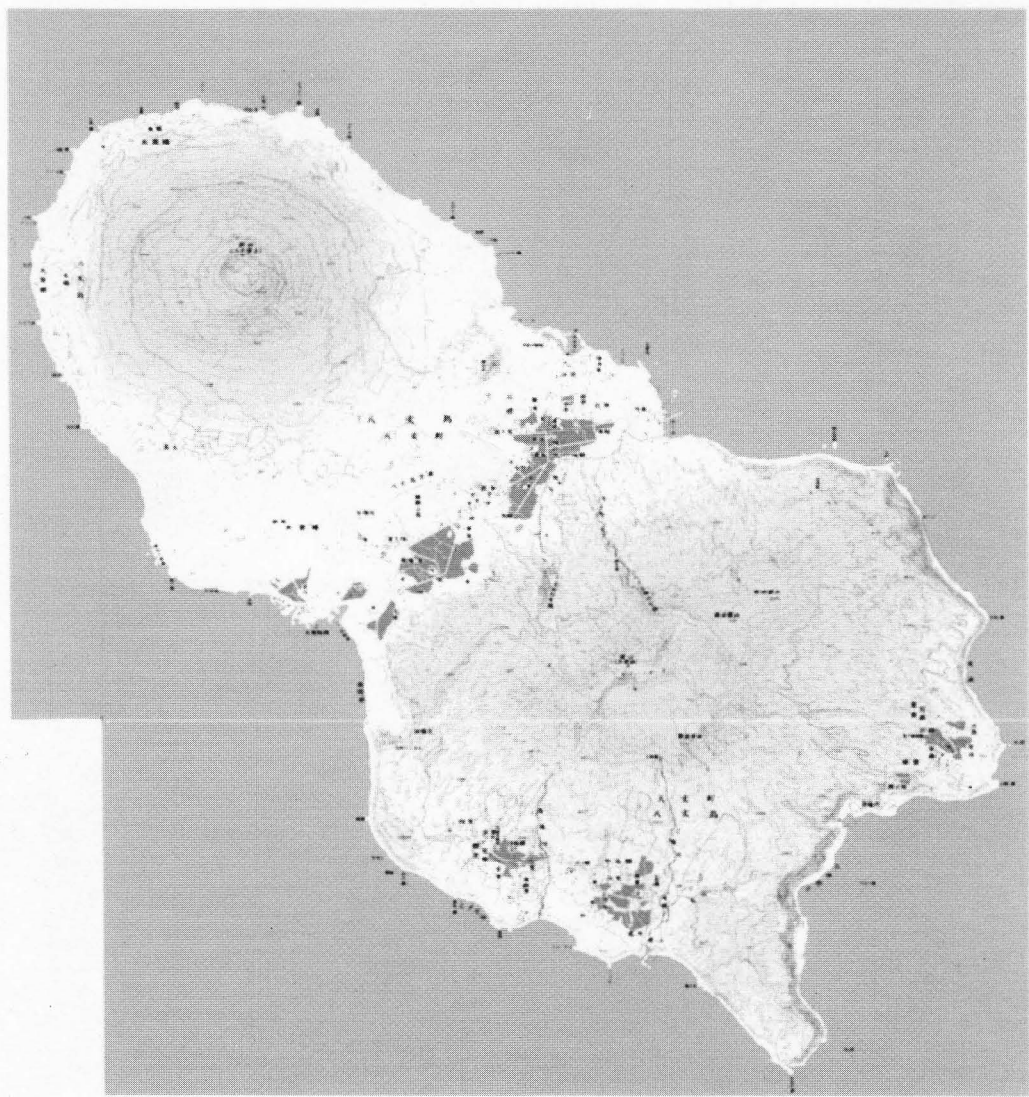
府の舟があり、松林の中に御舟庫があった。

陣屋前から測量を始め、海岸に向かったが、三〇間(約五〇m)先で道が分かれ、街道の測量のため大印の杭を打った。陣屋は、大図に示される大賀郷神場にあったものと考えられる。この杭から海岸に下り、前崎浜で前印の杭を打ち、島を一周するための印とする。そこから時計回りに海岸線を測量する。西山(八丈富士)の西岸を測量し、字日ノカタまで行き、日印の杭を打ったと「測量日記」には記されている。字日ノカタは、大図には記載されていない。

六月一日には日食となるため、島南端の末吉村に行き、垂揺球儀などを設置し日食の観測に備えた。しかし、天候に恵まれず観測は成功しなかった。末吉村の街道は、山の中の坂道で難所であるとの記述が「測量日記」にある。八丈島は、二つの火山から成り、北半部の西山は未だ開析が進んでいないのに対し、南半部の東山は古い火山で開析が進み、多数の谷が刻まれている。そのため、測量には難儀したのである。末吉村への街道の途中の中之郷には、鉄砲の稽古場があり毎月六度村役人が集まり練習すると「測量日記」には記されている。どのような目的があったのだろうか。

日食観測は不成功に終わったが、大賀郷に戻り、日印の杭から時計回りに海岸線を測量し、八丈島の周囲を一周した。「測量日記」には、「海岸大絶壁」などとの記載も随所に見られ、舟で先行して逆方向に測量して測線を繋いだり、測量に困難を極めたことが窺い知れる。また、末吉村で青ヶ島を遠測したり、小島(八丈小島)を遠測するための杭を打ったりしている。

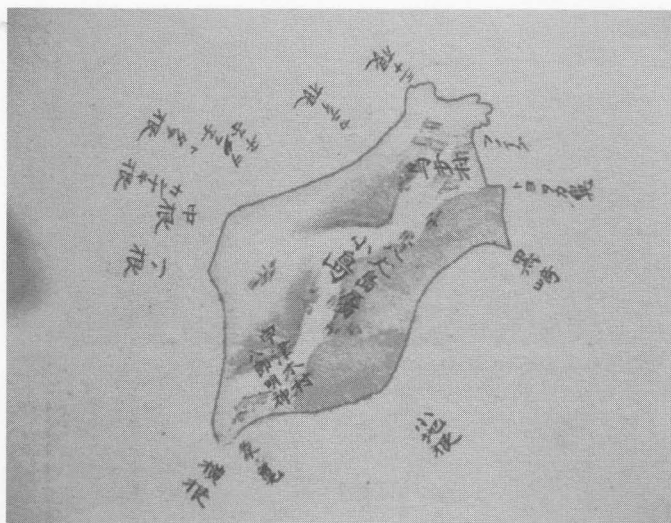
六月一日には八丈小島に渡り、三日かけて測量している。当時、八丈小島には、宇津木村、鳥打村の二村があり、源為朝を祀る八郎宮(八郎明神)があった。「測量日記」によれば、住人は男女合わせて四九三



第8図 彩色地形図 八丈島

人、ほかに流人が六人と記載されている。八丈小島には、このほか日帰りで二回渡っており、三宅島、御蔵島、青ヶ島の遠測を行っている。場所によっては、磁気に異常が見られ方位を正確に測れなかったようである。八丈小島は、現在では、住民すべてが離島してしまい、無人島となっている。地形図を見ても、墓地の≡と黒抹家屋の記号があるだけで、集落の痕跡や八郎明神も消されている。西山（八丈富士）も遠測のため数回にわたり登っている。西山の頂上付近は雲に覆われることが多く、待機しても観測できないことも多かったようである。西山には牛の牧場があった。東海岸の御正体山でも御蔵島、三宅島、蘭灘波島を遠測している。蘭灘波島は見えるのが稀である。「測量日記」には記されている。蘭灘波島は大図にも描かれている。「測量日記」には、字名などの地名が詳細に記載されている。しかし、図にはこれらの地名のごく一部が記載されているに過ぎない。「大日本

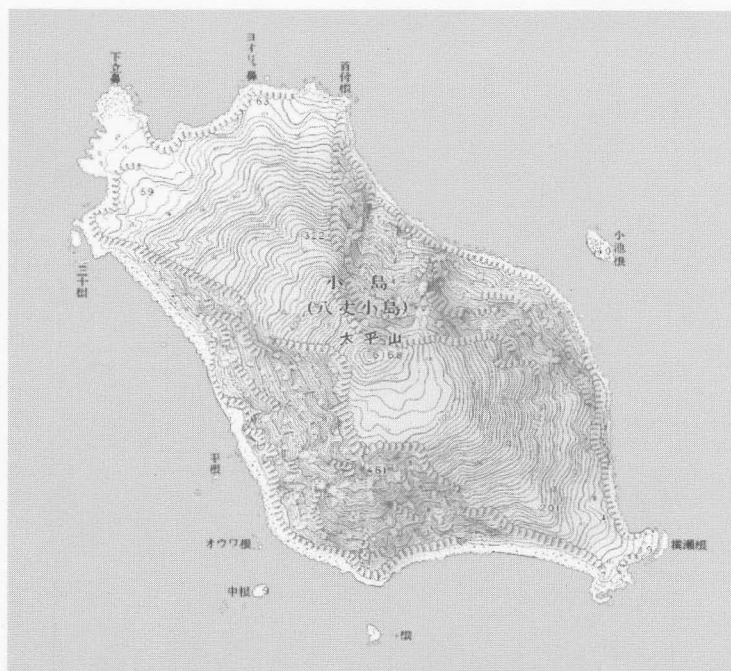
沿海輿地全図」には、これらの詳細な地名が記載されていたのか、今となつては知るよしもないが、八丈小島への三度の渡航、西山での待機、詳細な地名の調査など、今更ながらに伊能測量隊の仕事ぶりに敬服する。老齢のため、忠敬が指揮を執っていなかったにも拘わらず、天文方の下役や弟子たちがこれだけの仕事をやり遂げたのは、長期にわたる全国測量の間に組織としての伊能測量隊に測量技術上、また隊の運営においても多くの様々な経験の蓄積があったからであらう。



第9図 大図105号 八丈小島

「測量日記」については、佐久間達夫「伊能忠敬測量日記 伊豆七島測量篇」による。掲載した伊能図は、すべて国立国会図書館所蔵の大図である。「伊能大図総覧」から転載した。地形図は、すべて(財)日本地図センターがホームページで公開している彩色地形図である。

(ほしの よしひさ・代表理事・(社)日本測量協会副会長)



第10図 彩色地形図 八丈小島

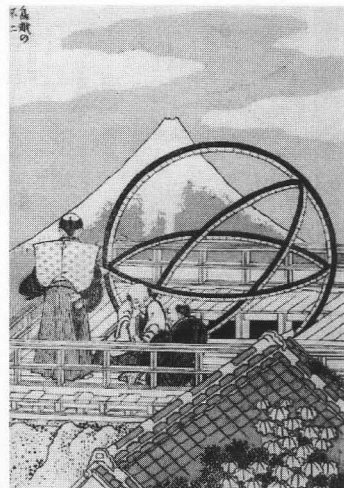
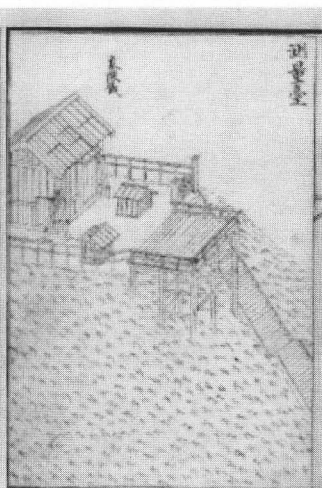
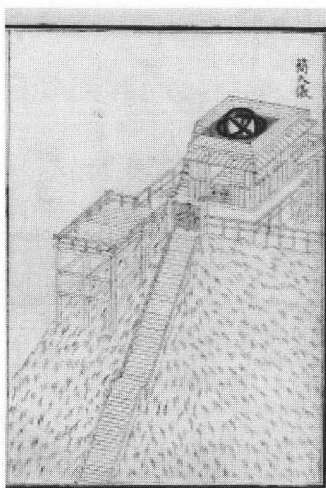
案内板「天文台跡」台東区浅草橋三丁目

この地点から西側、通りを一本隔てた区画（浅草橋三丁目二十一・二十二・二十三・二十四の全域及び十九・二十五・二十六番地の一部）には、江戸時代後期に幕府の天文と暦術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などを行う施設として天文台が置かれていた。天文台は、司天台、浅草天文台などと呼ばれ、天明二年（一七八二）牛込薬店（現・新宿区袋町）から移転、新築された。正式の名を「頒曆所御用屋敷」という。（略）

その規模は、「司天台の記」という史料によると、周囲約九十三・六メートル、高さ約九・三メートルの築山の上に、約五・五メートル四方の天文台が築かれ、四十三段の石段があった。また、別の史料「寛政暦書」では石壇は二箇所に設けられ、各五十四段あり、築山の高さは九メートルだったという。（略）

ここ浅草の天文台は、天文方高橋至時が寛政の改暦に際して観測した場所であり、至時の弟子には伊能忠敬がいる。忠敬は全国の測量を開始する以前に、深川の自宅からこの天文台までの距離を測り、緯度一度の長さを求めようとした。（略）明治二年に新政府によって廃止された。

台東区教育委員会



『寛政暦書』巻十九

「測量台の図」

『富嶽百景』『鳥越の不二』葛飾北斎



「日本科学史学会」から表彰

表彰状をいただいて 首藤郁夫

五月二三日の年会懇親会で、永年会員だったことで、私を含む三名が表彰されました。

該当者は三〇名ほどいた筈でしたから、予め「通信」にても該当者名を発表してあれば、唐突な感じを受けずにすんだのと思いました。学会のためには何等貢献せずに表彰されるのは面映い次第です。偶々前回（一九六二年）の九州年会プログラムを持参しており、高橋先生にお渡しできたのが、ささやかな記念になりました。

省みますと、当時の入会申込みには、紹介者が必要でした。理科大二部学生の小生が存じあげるのは、矢島祐利先生お一人だけでした。先生の授業は昼間だけだったので、会社を休んで研究室に先生をお訪ねしましたが、ご返事はなかったもので、一寸心配でしたが、『科学史研究』第二七号の入会者に名前が出ていたので安心しました。後年矢島先生の『科学史家の回想』を拝見すると科学史家志望者には職がないからやめなさいといわれた由、小生は就職していたので、許されたのかなと思いました。

（日本科学史学会『科史学通信』三九二号より）

浮島ヶ原自然公園を訪ねて

大 沼 晃

前号『伊能図の楽しみ方体験記』で「広沼」を紹介した。その「広沼（浮島ヶ原）」の面影を残す「浮島ヶ原自然公園」という自然湧水公園が東田子の浦にあるというので、先日、伊豆の大仁へ地域の仲間たちと旅行にでかけたついでに足を伸ばし、広沼の現在の姿を見てきた。

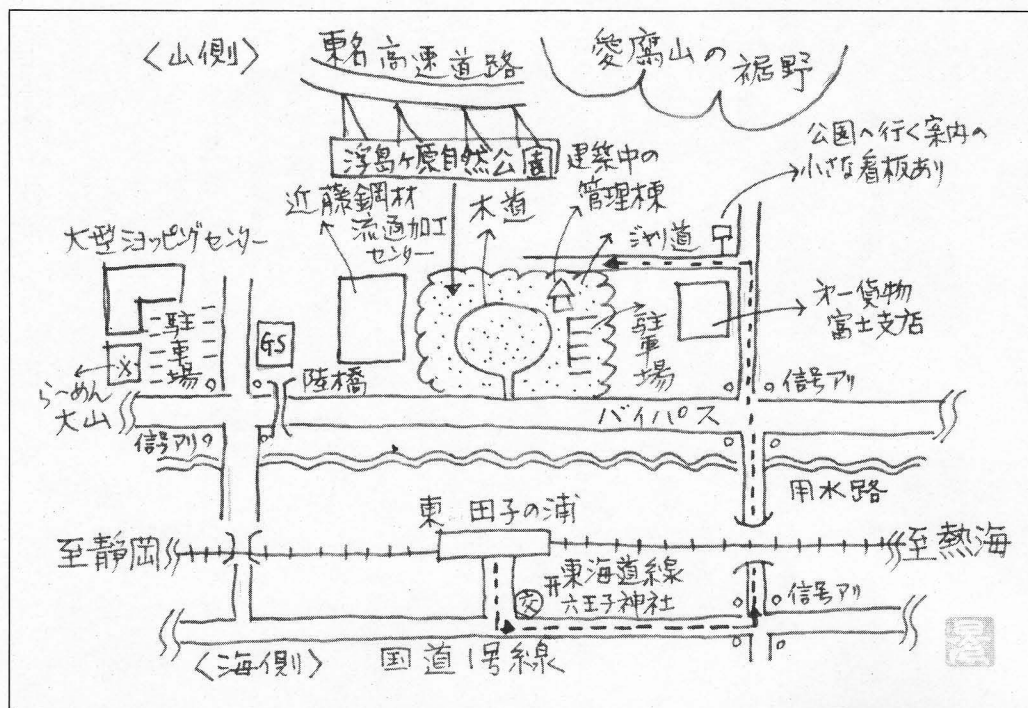
十月六日（超大型台風十八号到来の前々日）、小雨の中藤沢駅発九時四四分の熱海行き電車に乗り込む。熱海から沼津へ、沼津から静岡行きの東海道線鈍行に揺られながら目的駅も近いので、原駅から海側に目を転じると松林の間から海が見え始めてきた。山側は垂れ下がった雲に覆われて富士山や愛鷹山は見え、裾野は一面黄金色に色づいた田んぼ、その中に点在する人家等が目に入ってきた。ほどなく目的地の東田子の浦駅にはお昼直前に到着。ホームの名所案内板には、「浮島沼」「愛鷹山」「庚申塚古墳」「山神古墳」の標記と方角明記があった。

改札口は海側に一箇所しかないローカル駅で、駅員に「付近に観光案内所がありますか」と尋ねると、駅員曰く「ありません。少し先に交番があるので聞いてください」とのこと。改札口から外へ出て広い道を二〇〇メートルほど行くと国道一号線に突き当たる。その突き当りの左角が交番で、若い駐在さんに浮島ヶ原自然公園（以下公園）に行く道筋を尋ねながら「近辺に食堂はありませんか」と聞くと、親切な駐在さん曰く「十分ほどで行けます。駅周辺や途中にはありません。公園の先に大きなショッピングセンターがあり、その中にラーメン屋

があります」とのことと、空腹を我慢しながら一路公園目指して足を進める。

公園は、東側に第一貨物富士支店、西側には近藤鋼材流通加工センター、南側はバイパスに囲まれた狭い一角にあり、周辺は物流センターや倉庫群が点在しており残念ながら風光明媚とは言いがたし。公園裏口に管理棟が建築中で駐車場も完備しているが、平日、しかも天気が悪いので公園内は我ひとりの貸しきり状態。湿地帯の公園内を一周できる木道がつくられており、所々に写真や説明文入りの看板が立っている。そのひとつに「浮島ヶ原（筆者注―別名、広沼・浮島沼・富士沼）は、県内はもとより、全国的にみても貴重な湿地である。ヒキノカサ、ノウルシ、サクトラノオなどの貴重な植物やノハナシヨウブ、ミツハギ、クサレダマなど美しい花が見られる。かつてはミズバショウ、マツバオモダカ、アキナシ、トチカガミ、スブタ、ヒツジグサ等もみられたというが、現在では絶滅したと思われる」とあった。写真の中で強く印象に残るものは、胸まで浸かりながら田植えをしている風景で、普通の農作業より数倍の重労働であっただろうと、苦労が偲ばれた。狭い水路にはカモ数羽が遊んでおり、その両脇は背丈の高いアシが生い茂っていた。バイパス南側の出入口を出て振り返ると、公園全体を帰化植物セイタカアワダチソウが覆っており、一面黄色の波、また波であった。いまだでは間引くこともできないであろう。感傷に浸りながら帰路に着いた。

（おおぬま あきら・マネー&キャリアマネジメントアドバイザー）



「浮島ヶ原自然公園」 大沼 晃さんが描いたイラストマップ

公園を歩きながら 平家物語の出だしを
思い出しました。

諸行、無常。
是、生滅法。
生滅、滅已。
寂滅、為樂。

環境保存も大変難しいことですネ。
印ハ セイカアワダチソウを表しています。
〒251-0044

伊能図の時代には風光明媚な名所だった広沼。
今は諸行無常を感じさせる姿となった。

酒造家「伊能三郎右衛門家」

渡辺 一郎

しばらくぶりに日比谷の日本生命ビルに用事があって、帝国ホテルから日比谷の映画街を散歩していて、ビルが一つ無くなって空き地になつているのに驚いた。

帝国ホテルは毎年NTTのOB会があるので、行くことが多いが、すぐ直前の地下鉄に入るので、あまり周りを見ない。銀座で開かれる伊能アトリエの発表会にはたまに行くが、このときも帝国ホテルの横を通り抜けるので、あまりキョロキョロするわけではない。

何気なく散歩していたら、三井銀行本店の隣のビルが無くなって人口芝を張った広場になつていた。土一升、金一升の土地にプレハブ小屋を数件建てて、休憩室やコーヒーショップとし、椅子テーブルを出して憩いの場となつてゐる。

ビルの谷間の憩いの場提供なら味なこと、丸の内に出来たBRICスクエアの向こうを張つて三井グループが演出したのなら、よしよしとおもつたが、それには少しグレードが低いな。やつぱり資金繰りで建築計画を延期したままで、いずれはビルに戻るかな、などと余計な詮索を一人で見ながら見渡す。

端の方に菊正宗の酒蔵っぽい建屋があるので、覗いて見た。仮設の菊正宗記念館で三百五十年続いているという灘の菊正宗の説明展示が飾つてあつた。カウンターがあつてバータイムと称して生原酒を一杯二百円で売つていた。

つまみが無く酒だけなので、よく効いて少し口が滑らかになつたと

ところで記念館事業部担当という名刺を持った女性に聞いてみた。伊能忠敬を知っているか。勿論知つてゐる。忠敬のことを調べている者だが、伊能さんは酒屋だつた。醸造石数一四〇〇石、米搗きまで入れると酒作りの時期には五〇人位働いてゐたと記録にある。

「お宅は二百年前にお酒を作つていたか。」「勿論です。三五〇年やつています。」「それなら、一八〇〇年頃は何石くらい作つていたの。」「そのとき現場従業員は何人くらいだったの。」「話の種に面白いから、なるべく早く教えてよ。」「わかりました」

出口で「ここはいつまでやつてゐるの?」と聞くと、一ヶ月間の約束で日本酒のPRとしてやつてゐるとのこと。期限がきたら全部撤去するといふ。この頃日本酒の売れ行きが減つてゐるので、巻き返し作戦とか。なお聞くと、現在、菊正宗では本格的な仕込みをする杜氏は三〇人位、「それは少ないね」といったら、工場的にいつも作つてゐる従業員は他に三百人くらいいて、年に十萬石を作るといふ。

本格的なお酒はどうやら一割くらいらしい。安い酒は飲んではいけないんだな、と思ひながら電車に乗つたら、灘の菊正宗記念館の館長さんから携帯にかかつてきた。一八一〇年の酒造石数は四千二百石、伊能家の三倍だ。一八二〇年は八千石、その六年後には一萬二千石といふお話で、このときは灘でもトップクラスだつたらしい。

当時、菊正宗では、一蔵千石といつて、一つの蔵は、従業員一五人で千石を作つてゐたといふ。ただこれには米搗きは含まないとのこと。伊能家の数字は米搗きを含んでゐるので、どう考えたらいいか聞くと、半分以上米搗きでしょうとの返事。三〇人米搗きと考えると、醸造は二〇人、大体バランスするようである。

日本酒の立ち飲みから大分脱線し、伊能造り酒屋の研究(?)が進

んだが、伊能家の素顔、測量隊の日常などでは、まだまだ分からないことが多い。皆様身近なところから研究(?)を初めてみてはいかがでしょう。

以前に伊能忠敬は長命だったか、というテーマで同時代の有名人の没年を比較したら、九州の石川さんが更に詳しく調べていただいたことがあります。

テーマは身近に転がっています。例えば、伊能家の財産三万両といわれているが、どのくらいの金持ちだったのでしょうか。越後屋呉服店とか松坂屋などと比較して番付はどうだったのでしょうか。

江戸町人の研究は色々ありますから、すぐわかるでしょう。大金持ち(?)といわれている伊能三郎右衛門家は同世代では何番目だったか、キッコーマンの茂木家と比べたらどうだったかな、など研究テーマとして面白いでしょう。調べた人はいませんか新規性充分です。

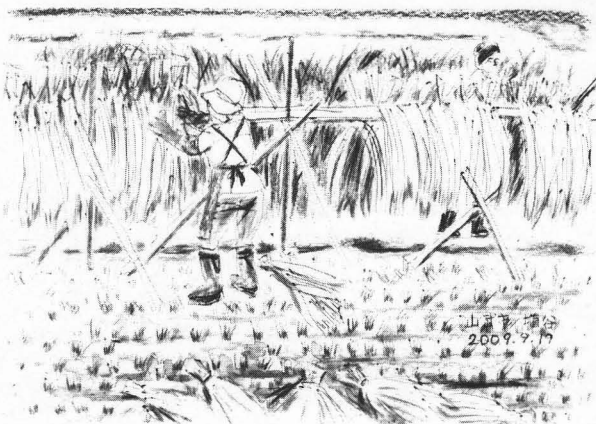
年末の持ち越し金八千両と記録がありますが、それって多いのか、少ないのか。また当時のGDPは何万両かな。等々、派生して色々伊能学は展開します。伊能忠敬を通してみた江戸学でもあります。

測量隊にしても、歴博の山本教授にいつか言われたことがあります。洗濯はどうしたんでしょうか。日程は一泊のところが大部分です。洗濯をしても乾かすことが出来ません。洗濯物を持って旅行する旅人の絵があるそうですが、洗濯持って測量はできないでしょう。

二泊するのは十日に一回くらい、これは多分休暇だったと思います。洗濯日にはなり難いのではないのでしょうか。

褌などは買えばいいですが、下着など捨ててゆくわけにもいかないでしょう。作業衣も替りがいらいますね。測量記録をよく読んでいるのですが、そういう記録には出くわさないのです。妄言多謝。(了)

(わたなべ いちろう・名誉代表)



おだ掛け 江口俊子氏・画
山武市埴谷 2009.9.19

近刊紹介



『図説 島原半島の歴史』(限定版)
監修 松尾卓次(島原史談会会長)
長崎県教科書(株)発売
郷土出版社発行
定価 11,550 円(要・在庫確認)
長崎県書店商業組合推薦図書

芳名錄
番外編

—佐原伊能家の人々— 佐原の母から東京の娘への手紙

伊能陽子

[illegible]

九州支部の馬場会員から佐野常民と伊能家の関係について問ひ合せを受け、麴町の佐野家に行儀見習としてお世話になっていた娘・りつへあてたヒサさんの手紙を思い出した。

佐野常民が忠敬の顕彰に力を入れ、曾祖父景文（忠敬から四代目）に声をかけた後のことと思われる。

[illegible]

外封筒

[illegible]

内封筒

【原文読み下し・注釈 伊藤栄子氏】

五月雨の時こう未だぬけやらで
日々ちら／＼雨にてこまり入、

乍去御同前二誠二しのき能

切上り候ハ暑サきびしく候

事と存まいらせ候 まつ／＼

御¹さへ／＼敷御勤被成居候御事

一同大安心致し居候べく候

上
下
刀
上
下
刀
上
下
刀

此方御父上様御初メ何之

障りも無御坐、御案し被

問敷候

先月中八

若御奥様御事、御産後

御養生不被為御叶、御死

被遊実^ニ御いと

乍恐山々御さつし

申上、さそく御

御こまり被遊、又

御奥様ニ何ともかと

御壺人之御子様実に

恐入御さつし申上居候

御力御おとしにて御不便

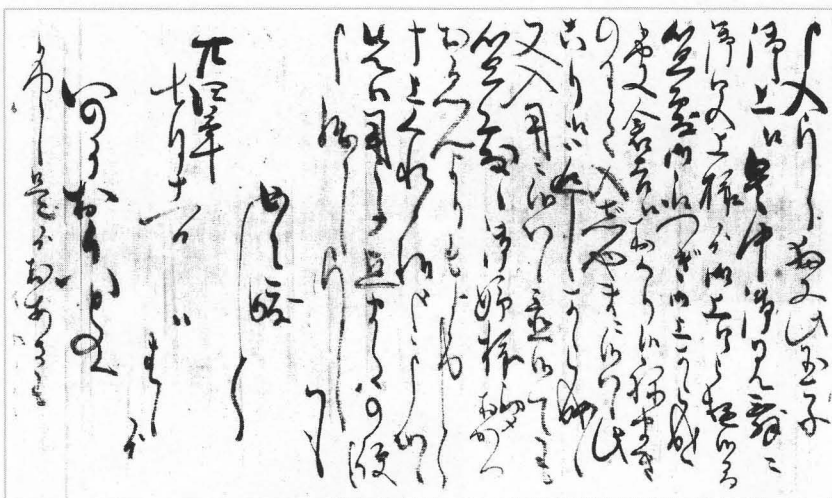
樣二被為入候御事、此程八何

候御事哉御伺申上度

尚又先日申こしの³ぼう

じま早速おり仕立おくり申

不出来二候へ共、御⁴ふしゆう被成候



*伊能ヒサ(一八三七〜一九一四年)

景文の後妻、五代目こう以下五姉妹の母(りつは三女)。江戸城にご奉公していたと聞く。彼女の打掛は伊能家から嫁ぐ者が代々着用してきた。

御申しこしの通り又々わた入ヲ
入おくり候へ共、右品にてハほう
はいしうの前も見にくき
又さむい夜も有之候と存
母とおかつと両人にて大いそきにて
此。かいまきヲ仕立饋り候間
御請取可被成候 古きひとへ物ヲ
かさねかけ可被成候 扱また
此節ハちへいか候哉 一同大
二心配致し居候 又あかされ
は此程はもはやなをり候
哉 委敷うけたまり度存候
山々案し居候 夫二丸葉ヲ
二十五りう(粒)と申入候へくも母
が毎夜のみ候のに、其数にてハ少々
過るやう二存、あまり下り過ると
存候へハ、かけ引ヲ致しのミ
可被成候 わすれなく毎夜く
おこたりなくのミ被成候 尚又
玉子も壺ツニてすくなくと
思ひ候へ、二ツつ、たへ候様に
可被成候 大事二養生千(専)一二
被成、御勤可被成候 御奉公中にて
さそくこまり候事と山々
御さつし申居候 くれくも
大切ニ被成候二御ねんじ
申入まいらせ候 扱又此玉子
御上江暑中御見舞ニ
御父上様より御上け被遊候間、
宜敷御取つぎ御上可被成候

尚又倉吉江おくり候ねまきの
わた入、じやま二候ハ此
こり江御返し可被成候

又入用二候ハ置候ても
宜敷候 御姉様初メおかつ
おまんよりよろしく
申上くれ候様ニと申出候
先ハ用事迄またの便と
申し残しまいらせ候 以上

めて度

かしく

二十四年

七月十一日

同

いのうおりつ殿

は、
より

尚々是よりおあさも
はけしく相成、御切かく
大切ニ御いとみく被成
御勤可被成候 以上

(いのうようこ・伊能忠敬研究会顧問)

- 1 さえぎえ
 - 2 いとしき
 - 3 ぼうじま
 - 4 ふしゆう
 - 5 ほうはいしう
 - 6 かいまき
 - 7 こり
- すがすがしい
いたわしい
棒島(縞)布のがら
不自由
朋輩衆
綿入れの夜着
行李 荷物いれ

研究レポート『伊能忠敬』（八）*（五）重複のため（八）とします。

忠敬の見た風景（その二）

石谷 春香

二日目 八月六日 晴れ

今日は江の島まで行きます。

六時半に起きて、一階のところでロールパンを

二つ食べました。

七時に出発です。

朝日が結構まぶしいです。



川ぞいに行きます。
森戸川の親木橋を
渡ります。



ここから東海道路に入ります。大きな通りを行きます。
国府津駅を通り過ぎます。



さらに行くと二
宮町の標識があり
ます。



少し行くと日本
橋から78キロ
メートルという
標識があります。

二宮駅を通り過ぎます。



サンクスに寄ってアイスを食べました。
「湘南かき氷バー」がありました。



このあたりの東海道押切坂付近は「かながわの古道50選」に選ばれています。さらにくと東海道一里塚の跡の碑があります。東海道には一里ごとに碑がありました。ここは江戸から18番目の一里塚です。

8 二宮町

二宮町に入って、押切川の押切橋を渡ります。



バスが通りましたが、プールに行く人でいっぱい。少し行ったらこゝろに小さな神社があったので、ちよつとやすみました。



9 大磯町

しばらく行くと、大磯町の標識があります。

不動川にかかる新不動橋を渡ります。

橋には大磯ロングビーチの看板もあります。



さらに行くと松並木がみえてきます。
一六〇四年（慶長九年）に松が植えられました。
このあたりは「かながわの古道50選」に選ばれています。

湘南
癸祥
大磯
之地



松並木の道を行くと
「しやうやん鴨立庵」があります。
そこは「かながわの建
築物一〇〇選」に選ば
れています。三〇〇年
にわたる俳句の道場で
す。入場料は五〇円で
す。



大磯駅の近くで右に曲がります。

江の島の標識があります。あと一六kmです。

長いまっすぐな道をずっと行きます。



スリーエフによって水を買います。

スー・イフ
 本橋店 5493-6140(5)
 兵庫県川中郡大町町大橋1302

破産 既 様

2007年 8月 8日 (月) 9:02

0120-1299-8714165	¥242
0120-221-3406	¥138
0120-221-3406	¥138
合計	¥574
※消費税別	¥73
合 計	¥647
お 預 け	¥5,000
お 預 け	¥4,428

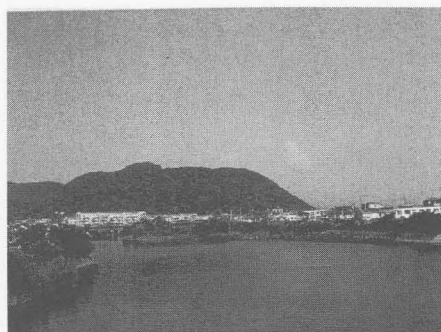
※要約の破産手続を食費、貸付金等により
 特別の債権として優先し、本破産手続に
 関係のない債権として債権者として取り扱
 った債権の優先権は発生致しません
<http://www.suisifu.co.jp/>

飲食店からロー
 子で受付け!

「監査の味と旅
 フェン」実直!

このあたりの東海道大磯宿は、宿場町として以前は大変な賑わいを見せました。

さらに進みます。道の左側を走ります。ずっと進んでいくと橋に着きましたが行き止まりになってしまいます！車がすごい勢いで走って行きます。どうしようかと思っていたら、サイクリングの人が通ったので聞いてみました。それから「反対側に歩道がありますよ」と教えてくれました。少し引き返して反対側に行きました。そうすると、歩道がありました。ここは相模川の湘南大橋です。



金日（花火）川の花水川橋を渡ります。とても景色がいいです。

この橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。

平塚は七月七日の七夕まつりはとても有名で、「かながわ未来遺産一〇〇」に選ばれています。



とてもとても長い橋です。

橋からの景色もとてもきれいです。湘南大橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。

11
茅ヶ崎市



橋を渡るとすぐに茅ヶ崎市の標識があります。道は走りやすいです。

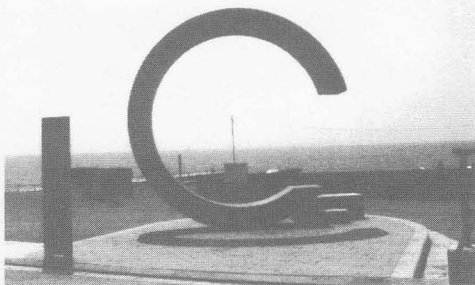
少し走って右に入ります。そこから「サイクリングロード」になります。「サイクリングロード」はすぐ海の近くを通っています。

走っていきます。



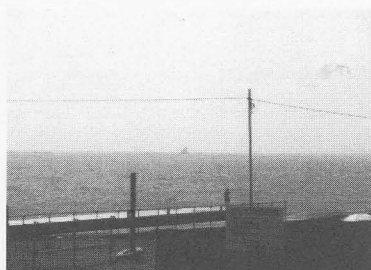
走って、走ります。……。
ところどころ道に砂があり、走りにくい所があります。
走ります……。
まっすぐ……。
そして……。
自転車を止めてしまいました。なんだか走るのが、いやになってきました。もう走れない……。。

前を見ると、道はずっと続いています。
・ ・ ・ ・ ・。でもここから家に帰ることもできない・ ・ ・ ・ ・。
休みます・ ・ ・ ・ ・。自転車を止めて海岸に出ます。
なぜかだれもいません。なんだか気持ちがいいです。
そういえば最初にルールを決めていました。
ルールその**3** あきらめない。ここであきらめたらなんだかいやです。
まだ走れる！お休みはここまで！走ります！まっすぐ！



海の家が
いくつもあります。

ずっと行くと
「サザンビーチ
がさき」に着きま
す。
「茅ヶ崎サザン
C」は、茅ヶ崎の
頭文字の「C」を
デザインしていま
す。



海の家でちよ
つと休みます。

正面には「烏帽子岩」が見えます。
ここは「神奈川の未来遺産100」に選ばれています。
そして江の島が見えてきます。
まだ遠そうです。



12 藤沢市

かわいい建物のマック
があります。
右側にある湘南海岸公
園は「かながわの公園
50選」に選ばれていま
す。



さらに行くとサイク
リングコースが終わ
りました。引地川の
鵜沼橋を渡ります。
江の島がだいぶ大き
くなります。

境川の片瀬橋を渡り、いよいよ江の島です！このあたりは「かながわの古道50選」に選ばれています。

江の島大橋を渡ります。橋は「かながわの橋一〇〇選」に選ばれています。橋の長さは三八九メートルになります。そしてとうとう江の島に到着です！



さらに進みます。「新江の島水族館」があります。

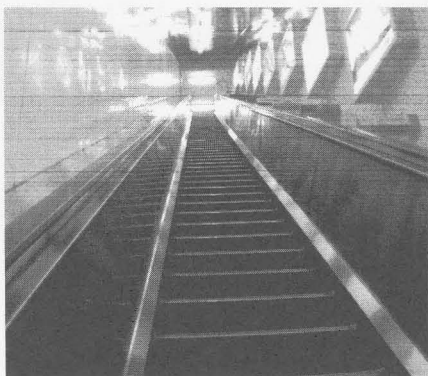


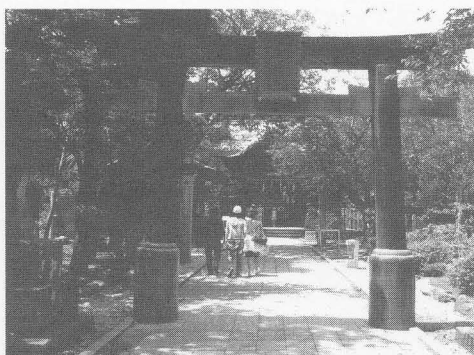
途中からエスカレーターに乗ります。何回か乗りま



江の島は「かながわの未来遺産一〇〇」に選ばれています。橋を渡ったところにたくさん自転車が止まっていたので、そこに止めました。

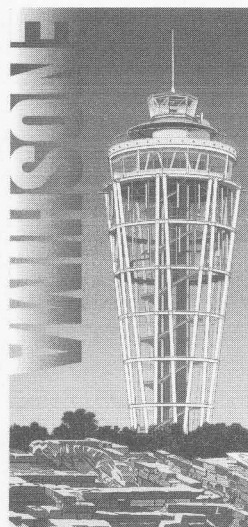
最初に泊まるところに行くことにします。おみやげやがたくさんあります。





江の島のさらに奥に進みます。江の島奥津宮おくのみやがあります。ここは三つある江の島神社の一つです。

最後まで乗ってそこから歩きます。そしてようやく着きました。民宿、海上亭です。しかし中に入ってもだれもいません。「すいませーん!」となんとか言おうと、ようやく民宿の人が出てきてくれました。しかし民宿の人は「ごめんなさい。まだ部屋の用意ができないんです。」と言いました。しかたないので荷物だけ預けて、お昼を食べに行くことにしました。

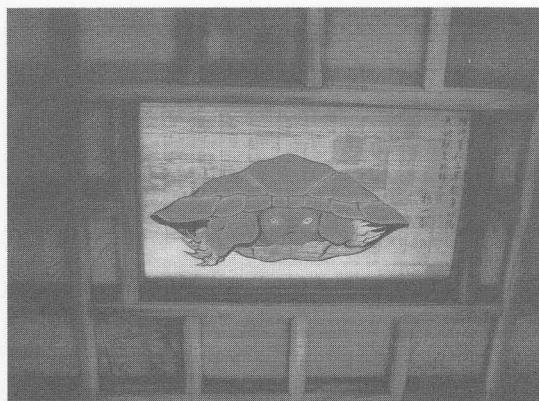


(上島遊覧は別途料金です)

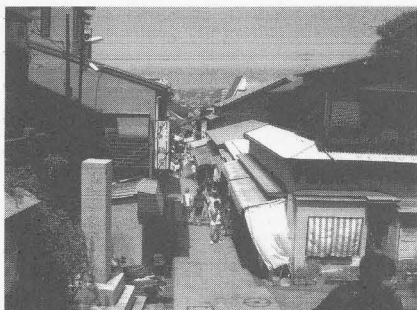
17. 一畝、一畝

エスカー利用券

さつき通ってきたおみやげやさんをみに行きま。近道があるのでそこからいきます。階段があつて、急な坂路があります。しばらく行くとさつきのおみやげやさんのところに出ます。



はっほうにのみ
八方睨みの亀の絵があります。どこから見てもこちらをにらんでいます。あるお店に入ってラーメンを食べました。窓からの景色がとてもきれいです。走ってきたところが遠くに見えます。



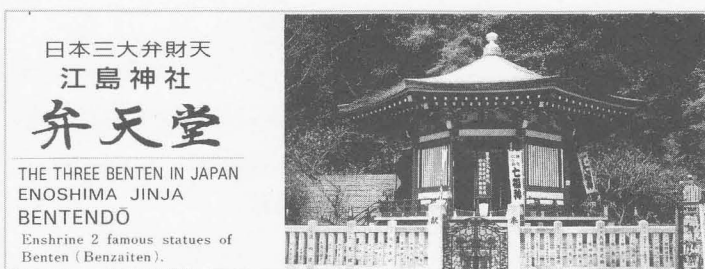
おせんべいやさんでおせんべいを何枚か買います。つめたいむぎ茶をだしてくれました。おつりも「四五〇万円です!」と、おもしろいです(このおじさんには、あとでも助けられます)。エスカレーターで上ります。おせんべいは、けっこうおいしいです。



江の島神社^{へつのみや}辺津宮があります。江の島神社の一つです。

その横には、江の島神社弁天堂があります。日本三大弁財天の一つです。

エスカレーターでさらに上ります。江の島神社中津宮があります。江の島神社の一つです。



日本三大弁財天
江島神社
弁天堂
THE THREE BENTEN IN JAPAN
ENOSHIMA JINJA
BENTENDO
Enshrine 2 famous statues of
Benten (Benzaiten).



お土産を買います。最後のエスカレーターを上ったところで、ちよつと休みました。



民宿に行く私の名前が出てい
ました。
部屋に案内してもらいました。

その時自転車の話をしました。すると「自転車はあそこには止めない方がいいです。いたずらとかされてしまいますよ。」と教えてくれました。「自転車はここまで運んできたほうが安全ですよ。」と言ってくれたので運ぶことにしました。



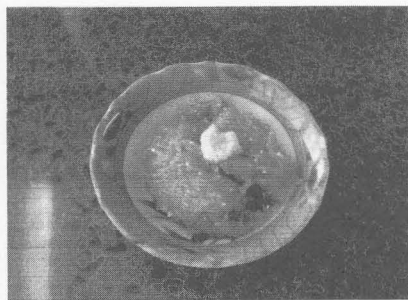


しかしここは江の島の一番高いところで、ここに来るまでエスカレーターで何度も上ってこなければなりません。自転車を押して上がるとなると、階段も持ち上げていかなければなりません。困りました……。さっきのおせんべいやさんに来たとき、もつと買うことにしました。

おじさんは「おかえりなさい！」と言いました。会計のときやっぱ「おつり一〇万円ね！」と言っていました。そのとき自転車の話をしました。

すると「上まで自転車は持っていけないよ！ないしょだけど、江の島の人間だけが使っている駐輪場を教えてあげる。」と言ってくれました。助かりました。

それから波打ち際ですこし遊びました。



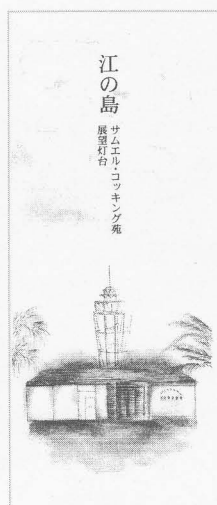
夕食、六時からでした。食堂の窓からは海がよく見えます。風がすごいです。

湘南名物の生しらすも出ました。でもなんだか、ぐにゅぐにゅしています。

隣のテーブルに小学生の男の子とお父さんが来ました。最初はだまっていたのですが、だんだん話をするようになりました。すると「今度は山中湖まで走ろうか。」と言っていました。え？自転車？声をかけました。するとそのお父さんは「私たちは相模原市から自転車で来たんです。」と言いました。同じようなことをする人がいるんだなと思いました。今日は四〇kmも走ったそうです。男の子はずっとだまっていました。部屋に帰って私のメーターを見ると、湯河原からスタートして六二・九〇kmでした。



私は二日でそうなので、男の子はすごいと思います。



夜に近くの江の島「サムエル・コッキング苑」に行きました。
イギリスの貿易商サムエル・コッキングが造った庭園です。

それから江の島展望台に登りました。塔の高さ、四六、八mになります。展望台からの景色はともきれいです。

つづく



(いしやはるか・文教大学付属高等学校一年)

柏木家に残された忠敬資料（四）

柏木隆雄

写楽の肉筆による扇面画が、江戸東京博物館に展示され話題となった。日本の美術関係者がギリシャのマノスコレクションの中から見つけ出したもので、この絵の発見により、謎の画家・写楽の謎がまた一つ増えたという代物である。ほかにも百点余りの江戸版画が展示され、摺り具合など状態のよいものが多く、中味の濃い催し物であった。ギリシャの外交官のグレゴリアス・マノスがジャポニズム人気に沸くパリやウィーンで買い集めたとのことである。

展示物の流れは、狩野派の大和絵、数点に続いて、江戸初期浮世絵の鳥居清長、奥村政信。中期では鈴木春信、勝川春草、歌麿など。写楽のものも「市川男女蔵の奴一平」ともう一枚あった。後期になると、歌川派の豊国、国貞、国芳、広重、それに北斎。代表作の「富嶽三十六景」から「凱風快晴」。これらの展示の中に司馬江漢の筆になるものが三点あった。多才な司馬江漢の履歴の中でも異才の浮世絵の下絵作家「春重」。鈴木春信門下、師の亡きあと、二代目春信を名乗ったこともあり、春信の落款のある三枚の絵も、作風が類似しているのので、江漢の筆によるものではないか、という疑いを持ってしまった。

江漢の画才は、浮世絵界の一下絵作家から、その驚くべき探究心によって開拓した銅版画、洋画、油絵、蘭学、医学、自然科学等、多岐の分野でその才能が発揮されることになる。

地理、天文学にまで及んだあくなき探究心と考察力から生れた成果の一つが、これから述べる『地球全図略説』の書である。

七、司馬江漢の『地球全図略説』

「東都 江漢司馬峻著、」で始まるこの解説書には前文が二つあって、冒頭五頁に及ぶ「題地球全図」（資料⑮）。もう一つは「地球全図小言」（資料⑯）と題した解説の付記みたいなもの。「題地球全図」は漢文で書かれており、本文の最後に、寛政壬子冬、磐水平茂質撰とあり、寛政四年冬に書かれた大槻玄沢の序文であることを示している。雅号の左横には「茂質」の角印も押されている。

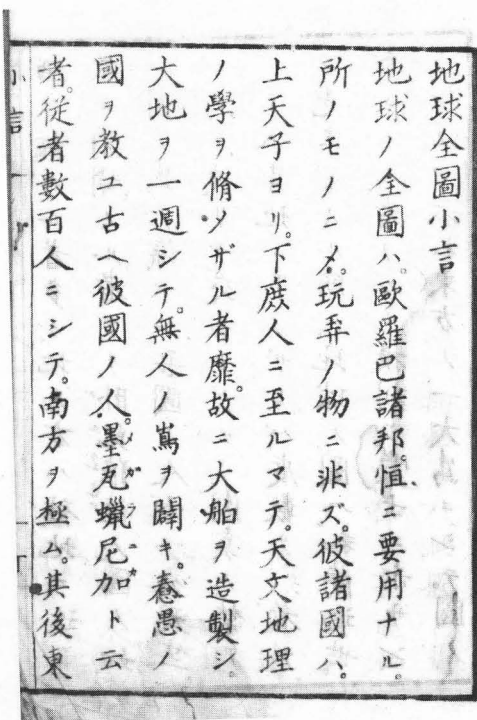
題地球全図

君嶽江漢氏、素善丹青、兼好技巧、嘗慕荷蘭之馨、彼之所舶瑋器図画之類、摸倣擬製者不為尠、蓋荷蘭之國、工手諸技、画図之写真、器械之使用、至精至巧、令人〇視、君嶽嘗説其書、欲伝其法、就余切磋之、往歲、欲考究、彼邦銅版鑲刻之法、乃問余其説、以造意之、創製銅鑲以示諸世、觀者無不感賞、近者思鑲彼邦所製坤輿之全図、因請余所藏西刻之一幅、而摸写之欲以上銅謀諸余、〆曰、曩月池桂君有此舉、校譬諸図業已脱稿、余亦与焉、足下舍諸、君嶽曰、彼則「梓也、此則銅也、請試製之、頃者其図新成、將請余言以題其図、余披以觀之、則其画線明、而悉其彫鏤工、而精殆不恥西刻、可謂尽心焉耳矣、惜哉、全図狭小、而邦国地形之參差、各州及諸島之名号等、多所闕略、請足下再加訂正、君嶽曰、尽其精探其「蹟、則其人在焉、若我、邦之人固暗地輿之事、唯僅識海外之國加蟬天竺阿蘭陀等之名、而鮮知其全州之大者、可謂蒙昧太甚也、余今製此図也、皆循西図雖未及其詳審、然已足知其梗概、夫万国之広邈、得使人知其大体、則余之素願足矣、余曰、「善矣、其於欲發人之矇、亦非無裨益、因慫慂公諸世

寛政壬子之冬

磐水平茂質撰

印（茂）印（質）



資料⑯ 「地球全圖小言」



資料⑮ 「題地球全圖」

地球全圖小言

地球ノ全圖ハ。歐羅巴諸邦。恒ニ要用ナル。所ノモノニシテ。玩弄ノ物ニ非ズ。彼諸國ハ。上天子ヨリ下庶人ニ至ルマテ。天文地理ノ学ヲ脩メザル者靡。故ニ大船ヲ造製シ。大地ヲ一週シテ。無人ノ寫ヲ關キ。愚愚ノ國ヲ教ユ。古ヘ彼國ノ人。墨瓦蠟尼加ト云者。從者數百人ニシテ。南方ヲ極ム。其の後東^{ガルウラン}西ヲ極ムル者多シ。北ノ方ハ彼地ニ近シ。故ニ開闢スル者アリ。臥兒狼德ノ國ノ如シ。圖ヲ見テ識ベシ。吾國ノ人。古ヘハ天竺海島ニ渡リテ。交易ヲナセリ。國家ノ禁アリテ。今其ノ地ニ至ラザレバ。度數ヲ知者ナシ。先生製スル所ノ。地球ノ圖ハ。和蘭近世。改メ正ス者以テ摸刻シ。蒙士ニ示サント欲ス。日本ハ東方ノ一大寫ニシテ。國ノ廻リ海ニシテ。万国ノ船。稀ニハ此國ノ。海岸ニ近ツク者アリト雖モ。言語文字通ゼザレバ。之ヲ弁別スルコト能ズ。彼邦遐シト雖モ。天竺ノ海島。恒ニ大船ヲ通シテ。属スル者多シ。日本ヲ去ルコト。南ノ方六七百里ニ過ズ。故ニ彼諸國ノ漂船。来ルコトアラバ。此圖ヲ出シ。示サンニ。立トコロニテ指シ別タン^{ワカ}。海辺ノ諸侯方ノ酋長ナドハ。所持シ玉ハズ。不虞ニ備ルノ。一助トモナラシカ。

寛政九丁巳春二月吉旦

塾從等誌

漢字まじり片かな文「小言」は、江漢自身の書いたもの、末尾の「塾從」は「塾徒」の誤りであると解題の記載がある。

忠敬資料（資料⑯）にはこの「小言」が入っており、増補版ということになる。

本題の『地球全図略説』の書き出しの部分は、この書物を刊行する江漢の趣旨、意図の説明である。文意は次のようになるうか。

「私（江漢）は、絵画製作の余暇に、オランダから到来の珍しい器物や絵画を複製し、また彼の国の銅版の技術を習得した。それにより諸々の図を新製して、知り得たことを他の人々にも知らしてあげたい。さらに、その技法をもつて万国図を製作することを思い立ち、諸国の地図等を探索して入手し、それを複写し銅版に写刻する。もともとわが国の人の多くは、世界の諸国の事を知らない。ゆくゆくはそれらの人々が、この図を見て、万国の大きさを知ることになる。ぜひそうなつて欲しい。精詳なことは、自分自身も識者の校訂を待つものである。同じ思いの学徒に少しでも役に立てば喜ばしい。という些少の志である。故に、この略説を以つて、それらの図と照らし合せて見れば、この略説が多少の便利になるだろう。」

文章は続くが、以下は江漢が本意であるところの『地球全図略説』、地理、天文学の分野の記述となる。

素人の誤訳は誤解を招くので、それは遠慮し、所々本文を転記し、江漢の銅版画による地球図、天体図等の絵画を文章の順に転写し、それを掲載する。

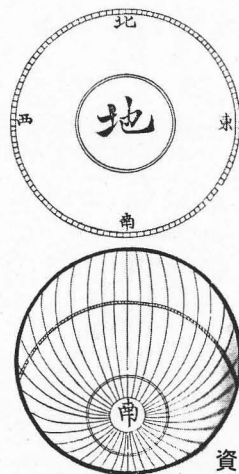
「彼星より此星に至りて天の一回をなす時、天の総廻を得るなり、是を三百六十余に割合て、此一を一度ト云なり、其天の三百六十度を地に引合て、地も亦三百六十にわりて、其一を地の一度と定む、一度ハ日本里数凡三十里許なり、前に云が如く、地は平面なるものにあらずして円なるを、其廻を三百六十に縦横ともに割合て、天の度と地の度の数に随て、万国の大小を分て割つけ、其円毯なる物を平面に

し、且半を分て二図とす爰に地毬を略図して度数をしめす」（資料⑭）

（資料⑭）

「月は一つの水晶の玉の如くにて、ひかりなきものなり、日の光りを受、映じ照して光をなす、月ハ地に近してめぐるといへども、直に黄道を行ず、一月に十二度づゝ黄道の南に遷なり、或六度黄道の北に遷、又六度黄道の南にうつる、是を遊輪といふ、日と同所を旋ず、故に行合重たるとき日蝕するなり、又日月の間に地を隔て、月地のために塞られて月の光を失ふゆへ、月蝕する也図を見てさとり知べし」（資料⑮）

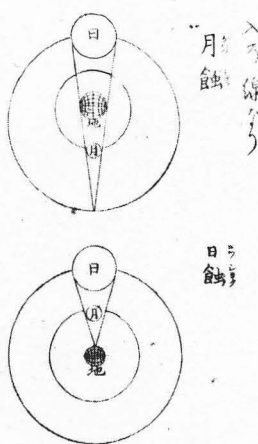
（資料⑮）



資料⑰



資料⑱



資料⑲

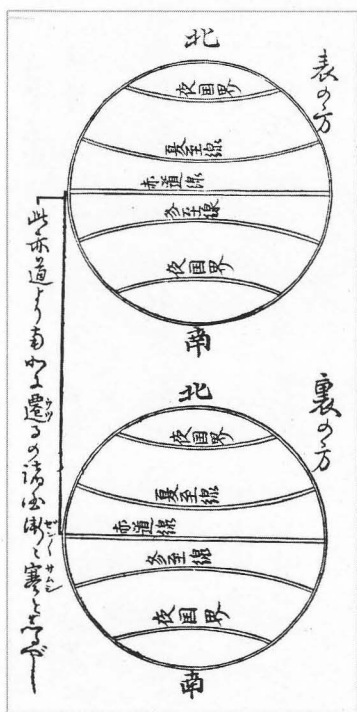
月ハ一つの水晶体の玉の如くしてめぐるなり

江漢の解説は実に判り易い。市井人向けの言葉遣いである。今ならば中学生の理科、社会科の教科書である。

略説の後半は、地理・風土に関する記述となる。地球を南北、表裏に区分し、春分・秋分・夏至・冬至の仕組み、気候、寒暖の違いを、地域や地名を挙げて説明している。江漢自身の長崎行の体験を語り、文章に具体性を持たせている箇所もある。

○表の方 裏の方 此赤道より南北に遷るの諸国漸々寒としるべし
アメリカ大洲も此日本の裏にあたりたる国にて、此土の寒暖も表の如く、赤道直下ハ常に熱し、赤道南北によりてハ漸々寒、此諸国ハエウロツパ諸州の人渡り開し国多し

○日本国の如きハ赤道を三十五六度去の地にして、寒暖時に随ひて異なり、支那の南京ハ日本の肥州と同じ、北京ハ奥州」蝦夷にひとし、かくの如くにしてエウロツパ諸州の寒暖、此度の線を推て知べし
○此界より北の方日輪の及ばざるの地にして、夜国冰海と云、春分のころより早天の如く、夏至に至てハ昼をなす、此時に漸日光を纔に見る、然とも日上に旋らず地に就て周転、秋分のころハ則日暮にして日



資料②①

地下に入、冬至の比ハ夜の子の刻のごとし、春分に至るまで夜をなす、此国近ころはエウロツパの諸州の人開て、鯨胤をして産」業とす、ウニコールも則此海の産なり、北極直下の地にして亦南極の方も是と同じ」(資料②①)

「地球全図略説」の中から所々を割愛しながら諸説を引用してきたが、最後に最終頁を掲載し、この項の終りとする。(資料②①)

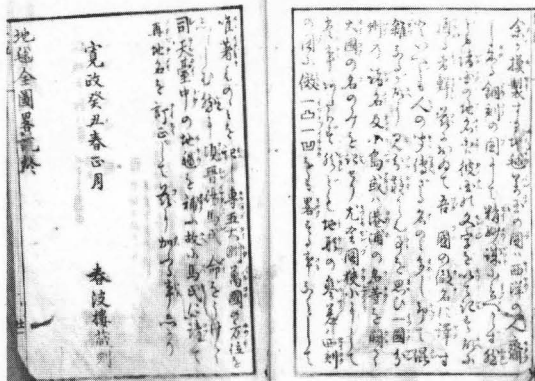
「余が摸製する地毯万国の図ハ、西洋の人贗し来る銅刻の図にして、精妙誠に云ふべからず、然ども諸国の地名等ハ彼国の文字を以て記す故に、通る者鮮、茲

におゐて吾国の仮名に訳すといへども人の聞伝ざる名のミ多し、却て混雑なるが故に見分難からん事思ひ、一国分州の諸名及小島、或ハ港浦の名等を闕て大國の名のみを記せり、尤全図狭小にして尽事あたはず、然ども地形の参差ハ西刻の図に倣、一凸一凹をも略する事なくして、「唯著もの」ミを記し、専五大洲万国の方位をしらしむ、然に頃晋陽馬氏命をうけて、天文館中の地毯を補ふ、故に馬氏に請て、再地名を訂正して、茲に加ふる事しかり」

寛政癸丑春正月

地球全図略説終

春波楼蔵刻



資料②②

八、江漢と忠敬

司馬江漢と伊能忠敬は没年（一八一八）が同じ。江漢の享年は八十一歳説もあるが、七十二歳が正しいようで、一七四七年の生まれ。忠敬より二歳の年下で、二人は同年代。同じ時世を共有していた。

江漢は江戸で生まれ、幼少より絵を描くことを得意とした。『春波樓筆記』によると、刀工か金工になったかかったと書いてある。『和蘭天説』の跋文に「幼少より市井に長じ、幼い時、野に出て昆蟲類の動態に喜びを感じ、家に帰つて寝ずに観察した」とある。江漢は生来、自負心と名誉欲が強かつたようだ。忠敬にも幼児期から聡明だったことの伝説がある。忠敬自身の書き付け（娘の妙薫に与えた書翰）も中にも「自分は幼いころから高名出世を好んだ」とある。

忠敬の業績は「刻苦勉強」の成果とみるが、江漢は「才気煥発」によるものと思う。忠敬は江戸に二十余年、測量一途に凝縮した努力の結果が今日の日本の姿、形を明確にした実測による日本輿地全図となつた。

江漢は生まれながらの江戸っ子。居ながらにして江戸から地方に至るまでの情報を得ており、幅広い交友関係から海外の文化・文明まで享受できる立場にあつた。江漢の凄いのは美術、蘭学、天文学に至るまで関わった全ての分野で超一流だったこと。幼時には好んで生物、生体の観察とその考察力が全ての業績の下地となつてるように思う。

江漢と忠敬の関わりを『忠敬日記』に見る。第五次測量出立の日、文化二年二月二十五日、「――品川まで送別しける人々は、小林勝蔵、松野茂左衛門、司馬江漢、伊能三郎右衛門、会田算左衛門、大川治兵衛、松田幸太郎、天満屋八右衛門なり。品川宿にて中飯す。松野茂左衛門は同所より帰る。小林勝蔵は大井村より帰る。伊能三郎右衛門、大川治兵衛、天満屋八右衛門も同大井村迄送別なり。暮に川崎宿に着。

測量は六郷川向にて止。此夜晴天測量。会田算左衛門、司馬江漢、兩人此所迄送り翌朝帰る。品川宿より当宿へ二里半。」「江戸日記」ではもう一個所、江漢名の記載がある。「文化六年四月九日、朝より晴。司馬江漢来る。」

「地球全図略説」が刊行されたのは寛政五年、この年、忠敬はまだ佐原に在った。隠居する前年に当り、家業に励んでいた。江戸に出たのは寛政七年（一七九五）、翌八年に高橋至時に師事する。略説の増補版が刊行されたのが寛政九年、この年、白昼に金星の南中を観測したと年譜にあり、識者の間では江漢の地球図関連図書も話題となつていたと思う。

忠敬もこの増補版をいち早く入手したと思われる。佐久間達夫氏が整理・編集した忠敬の蔵書、約五千冊の中に天文に関するものは意外に少ない。「天経或問」「天学指要」「天文図解」「地球一覽図」など。柏木家に残された資料の「地球全図略説」はその中に含まれていない。蔵書の中の「地球一覽図」一幅、とあるのは、次号で記述予定の、天明三年刊、三橋釣客の「地球一覽図」と同じものなのかはまだ知り得ていない。

忠敬の測量開始から遡ること三十年、明和七年（一七七〇）に江漢の浮世絵師の師・鈴木春信が病没し、江漢に転機が訪れた。師を変え、朋輩を変え、江戸系洋画の祖・秋田蘭画の平賀源内、小田野直武等との交際を持つ。この人脈は、後に、前野良沢、杉田玄白、大槻玄沢等の蘭学者との知己につながる。

一方、遅れて知性集団の第一線に登場した忠敬は、江漢の人脈を利用しながらも、近藤重蔵、江川太郎左衛門等とも交接し、その律儀・実直な性格により交際を深めていった。

松平定信のような要人の非難を受け、友人からも疎ましく思われることが多くなった司馬江漢は、厭世虚無的な思想をもつようになる。忠敬との性格の違いが、二人の晩年の境遇を変えてしまった。最後に、江漢の「和蘭天説」から「象限儀之図」（資料②）を挙げておく。忠敬は、江漢の舶来知識と天体宇宙への深い造詣にずいぶん助けられたと思う。

（かしわぎ たかお・税理士・作詞家）

【柏木家資料】

『地球全図略説』 司馬江漢著 国立歴史民俗博物館所蔵

歴博への寄託者 香取市佐原

柏木俊一

写真撮影

成田市

佐藤 勲

【参考資料】

『司馬江漢全集』八坂書房

『司馬江漢 百科事展』

神戸市立博物館企画展図録

『小田野直武と司馬江漢』美術史学会第七〇号 成瀬不二雄他

『司馬江漢のミクロコスモス論』二宮睦雄著『医学史探訪』

『司馬江漢』新潮社

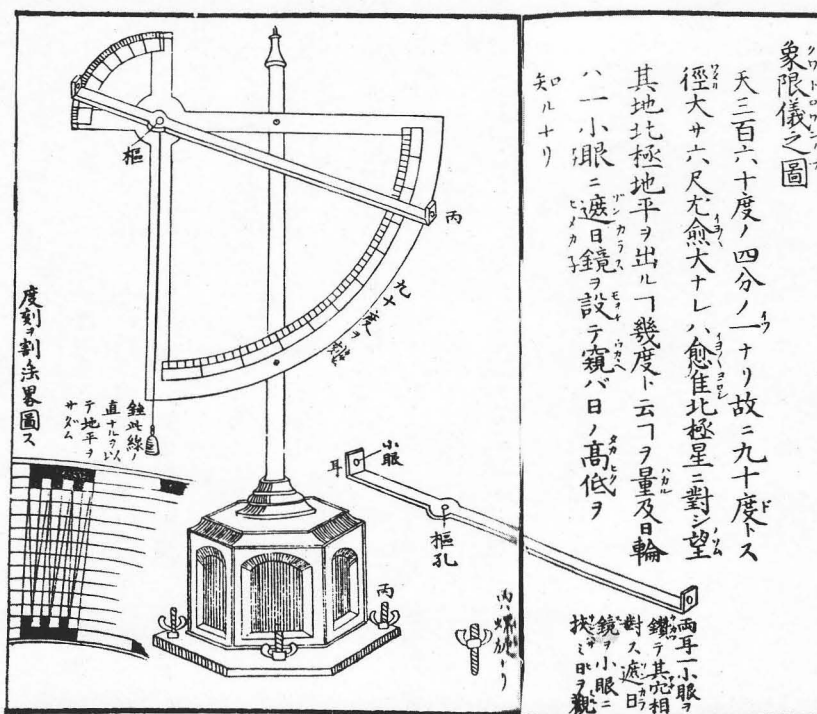
神戸市立博物館 岡 泰正

『伊能忠敬日記』

佐久間達夫編

【次号予告】

・『地球一覽図』（木版手彩色）天明三年刊



梵天を立てた所は三十万から四十万箇所

伊能忠敬測量隊の全国測量

佐久間 達夫

伊能忠敬測量隊が、十七年の歳月と十回に分けて、日本全国の沿海・街道・島嶼・湖沼を実測し、その資料を基にして、始めに作成したのが、縮尺三万六千分の一の「伊能大図の下絵図」である。

「伊能大図の下絵図」を広げると、まず眼につくのは、測線上に「一ミリメートル」程の点が多多くついていることである。これは、測線に沿って梵天を立てた場所であり、伊能測量隊は、梵天と梵天の二点間の距離と方位を測定し、それを地図上に記し、下絵図を作ったのである。

筆者が、香取市佐原の伊能忠敬記念館に勤務していた時、參觀にこられた小学生から「伊能測量隊は、梵天を何箇所くらい立てたのですか」と、よく聞かれた。そのときは、調査をしていなかったのですが、「梵天の数は、調べていないので、正確な数値はわからないが、測量距離を四万キロメートルとして、百メートル間隔に梵天を立てたとすると、四十万箇所になるかな」と予想値をいつていた。

そこで今回、正確な数値はでないと予想できるが、一応調査を試みてみた。しかし、日本全国の伊能大図の下絵図はないし、あったとしても全部をかぞえることは不可能なので、標本調査による数値の推測をすることにした。標本は、筆者の手元にある「伊能大図の下絵図」

から、沿海測量は「伊豆国熱海村より伊豆東海岸を下田町まで」を、街道測量は「筑前国黒崎駅より長崎街道を山家宿まで」を、島嶼測量は「伊豆国三宅島」を、それぞれ選定した。

また、測量距離は、「伊能忠敬測量日記」と、文政四年に幕府に上呈した「大日本沿海実測録」、それに保柳睦美編著の『伊能忠敬の科学的業績』（古今書院）のなかの「伊能隊の測量旅行距離」を引用した。

・熱海村より下田町

資料一 第九次伊豆七島・富士山麓付近測量日記

佐久間達夫 校訂

・自伊豆国下田町至熱海村

・文化十二年十一月二十日 晴天、午中頃下田町出立。稻生沢川舟渡し、岡方村、柿崎村、白浜村、縄地村、谷津村、浜村に至る。すべて海岸付山越三里、七ツ時過、止宿百姓斎賀屋十兵衛、名主幸左衛門。

十一月二日 浜村逗留

(以下、出立・逗留のみ記述)

十一月二日 浜村逗留

十一月三日 浜村逗留

十一月四日 浜村出立

十一月五日 稲取村出立

十一月六日 片瀬村出立

十一月七日 大川村出立

十一月八日 八幡野村逗留

十一月九日 八幡野村逗留

二月朔日	八幡野村逗留
二月二日	八幡野村出立 富戸村止宿
二月三日	富戸村逗留
二月四日	富戸村出立 川奈村止宿
二月五日	川奈村逗留
二月六日	川奈村出立 和田村止宿
二月七日	和田村逗留
二月八日	和田村出立(大仁街道測量) 徳永村止宿
二月九日	徳永村出立(大仁街道測量) 柏久保村止宿
二月一〇日	柏久保村出立(大仁街道測量) 城村止宿
二月十一日	城村出立(大仁街道測量) 和田村止宿
二月十二日	和田村出立 宇佐美村止宿
二月十三日	宇佐美村出立 網代村止宿
二月十四日	網代村出立 熱海村止宿
二月十五日・一六日	熱海村止宿

資料二

伊豆国の下絵図 伊能忠敬記念館蔵

・自伊豆国熱海村至下田町 実際の長さは『日本実測録』引用

熱海村	一	梵天数	八四ヶ所	実長	二里一〇町一六間
網代村	一	梵天数	三一ヶ所	実長	一里二七町二七間
宇佐美村	一	梵天数	六三ヶ所	実長	一里九町三六間
和田村(又、伊東と呼ぶ)					

計

梵天の数 七一九箇所

沿海距離 二二里二七町五〇間三尺

(八九・四三七・一八km)

一	梵天数	一一四ヶ所	実長	三里一八町三九間	
富戸村釜屋浜	一	梵天数	五〇ヶ所	実長	一里二七町一二間半
八幡野村	一	梵天数	一二四ヶ所	実長	二里二一町三〇間
片瀬村	一	梵天数	四二ヶ所	実長	一里七町一八間
稲取村	一	梵天数	四〇ヶ所	実長	一里三三町四八間
浜村	一	梵天数	六一ヶ所	実長	二里一一町五三間
白浜村	一	梵天数	六二ヶ所	実長	二三町四八間
柿崎村外浦	一	梵天数	三四ヶ所	実長	一里三二町五九間
須崎村	一	梵天数	一四ヶ所	実長	一里一九町二四間
下田湊					

資料三

伊能隊の測量旅行距離

『伊能忠敬の科学的業績』(古今書院)より引用

● 主要測線距離(『日本実測録』より引用)

沿海 三、七九二里一六町一間

一四、八九四・〇七km（筆者換算一四、八九三・九五）
街道 三、〇四八里一〇町一九間

一、九七一・五四km（筆者換算一一、九七一・四四）
島嶼・湖沼の周廻 一、七四六里一一町一四間

六、八五八・二九km（筆者換算六、八五八・二四）
計 八、五八七里二町三四間

三三、七二三・九〇km（筆者換算三三、七二三・六三）

※ 注釈（保柳睦美記）

- ・北海道は、伊能忠敬が測量した距離だけとする。
- ・一尺は、〇・三〇三〇三mとして換算する。
- ・前記以外に社寺や止宿宅までの仕越分を加えると、さらに一〇%内外は、大きくなるだろう。

● 主測線距離（「測量日記」より引用）

八、六一六里一〇町三・五間

三三、八三八・七一km（筆者換算三三、八三八・四五）

測量全距離（再測距離も含む）「測量日記」より引用

九、八七六里一六町五五・五間

三八、七八七・八四km（筆者換算三八、七八七・五五）

※ 注釈（保柳睦美記）

- ・江戸府内測量での距離は不明である。
- ・「日本実測録」に記されている「主測線距離」よりも長くなっているのは、「測量日記」では、仕越分を加えてあるので当然である。
- ・他日修正の機会があるとすれば、そのときの合計距離は、さらに長くなる見込みである。なお、距離は細かく計算してあるが、む

しろ概数的にみてもらいたい。

保柳睦美氏は、「測量日記」を基にした測量距離の注釈で「江戸府内測量での距離は不明である」と記述しているが、筆者は、「忠敬先生日記五一」を解読し、第十次江戸府内一回目の測量距離を十九里三十二町五寸（七八・一〇九〇一km）と、算出した。

「伊能隊の測量旅行距離」では、「日本実測録」より集計した「主測線距離」は、八千五百八十七里一町三十四間、一尺は〇・三〇三〇三mとして換算し、三万三千七百二十三・九〇km（筆者換算三万三千七百二十三・六三km）と、記されている。

また、「測量日記」により集計した「主測線距離」は、八千六百十六里十町三間半、三万三千八百三十八・七一km（筆者換算三万三千八百五十六・四〇km）、

「測量全距離（再測距離も含む）」は、九千八百七十六里十六町五十五間半、三万八千七百八十七・八四km（筆者換算三万八千七百八十七・五五km）と、記述されている。

したがって測量距離は、「測量日記」により集計した「測量全距離」を使用することにした。しかし、このなかには前述したように江戸府内の測量距離が含まれていないので、筆者が算出した一回目の測量距離十九里三十二町五寸を加えて、九千八百九十六里十二町五十五間三尺五寸（三万八千八百六十五・九五km・筆者換算三万八千八百六十五・六六km）を用いることにした。

全国測量で、梵天を立てた箇所を求めるには、
（測量日記の測量全距離＋江戸府内測量距離）÷（熱海村より下田町迄の距離÷梵天を立てた箇所）で求められる。

(三八、七八七・五五km+七八・一一km) ÷ (八九・四三七km ÷ 七
一九箇所)

||三八、八六五・六六km ÷ 〇・一二四三九km

||三一、四五〇(箇所) 約三一万箇所。

これにより全国で梵天を立てた箇所は、約三一万箇所と推察できる。

・黒崎駅より山家宿

次に「筑前国黒崎駅より山家宿までの長崎街道で梵天を立てた箇所は、「伊能大図の下絵図」から四百八十九箇所、この区間の測量距離は、「測量日記」から十二里十九町二十六間五尺五寸(四九・二四八七km)であることがわかった。

この測定値から、全国で梵天を立てた箇所は、

(三八、七八七・五五km+七八・一一km) ÷ (四九・二四八七km ÷ 四

八九箇所)

||三八、八六五・六六km ÷ 〇・一〇〇七一km

||三八五・九一七(箇所) 約三九万箇所

これにより全国で梵天を立てた箇所は、約三九万箇所と推察できる。

資料四 第八次九州二回目測量日記

佐久間達夫校訂

・自筑前国黒崎駅至山家宿

・文化九年一月二十九日 曇天、小雨。朝六ツ後黒崎田町出立。手分、後手我等、門谷、尾形、保木、甚七、同所より初め、遠賀郡熊手村字京良下、人家三四軒、右引野村、左市瀬村。上上津役村、左少。引野村、下上津役村、上上津役村、三ヶ村入会。字上ノ原、小休。また左右上上津役村字町上津役村小休。小嶺村界まで測る。一里二十二町十

八間五寸、黒崎より二里という。上石坂立場、銀杏屋定市中食。

先手坂部、永井、今泉、箱田、佐助、遠賀郡小嶺村より初め、香月村字上石坂立場、中食藤太郎。石坂川土橋幅九間。字下石坂、馬場山村字茶屋原、楠橋村字真名子、鞍手郡木屋瀬駅止宿前まで測る。一里十九町三間。上石坂より一里という。黒崎駅より三里という。それより赤間道の追分まで測る。四町三十九間三尺。先手合一里二十二町四十三間三尺。木屋瀬駅九ツ後に着。止宿本陣甚平、別宿長崎屋弥平治。木屋瀬宿代官小嶋源五右衛門病氣を断り手代を出す。

二月朔日 木屋瀬宿逗留

(以下、出立・逗留のみ記述)

二月二日 木屋瀬宿出立 飯塚宿止宿

二月三日 飯塚宿出立 内野宿止宿

二月四日 内野宿出立 山家宿止宿

資料五 長崎街道下絵図 伊能忠敬記念館所蔵

・自黒崎駅至山家宿 実際の長さは「測量日記」引用

黒崎駅

一 梵天数 五五ヶ所 実長 一里二二町一八間五寸

小嶺村

一 梵天数 四三ヶ所 実長 一里一九町三間

木屋瀬村

一 梵天数 一〇〇ヶ所 実長 二里二一町三四間五尺八寸

勝野村字鶴池

一 梵天数 八七ヶ所 実長 二里 六町五四間

飯塚駅

一 梵天数 四六ヶ所 実長 一里一〇町三六間
瀬戸村字瀬戸鼻（秋月街道追分）

一 梵天数 一一ヶ所 実長 八町五三間二寸

壽命村新茶屋

一 梵天数 五四ヶ所 実長 一里三〇町二四間

内野駅 冷水峠

一 梵天数 九三ヶ所 実長 一里七町四三間五尺

山家宿上西山茶屋ヶ原

計 梵天の数 四八九箇所

街道距離 一二里一九町二六間五尺五寸

（四九・二四八七四km）

・三宅島一周

島嶼の一島である「伊豆国三宅島」の一周距離は、「測量日記」から七里二八町六間四尺（三〇・五五七五km）、この区間で梵天を立てた箇所は、「伊能大図の下絵図」から二百五十九箇所である。

この測定値から、全国で梵天を立てた箇所は、

（三・八七八・五五km + 七八・一一km）÷（三〇・五五七五km ÷

二五九箇所）

≒ 三八、八六五・六六km ÷ 〇・一一七九八km

≒ 三二九、四二五（箇所） 約三三万箇所

これにより全国で梵天の立てた箇所は、約三三万箇所と推察できる。

資料六

第九次伊豆七島・富士山麓付近測量日記

佐久間達夫校訂

・三宅島一周

・文化十二年五月十九日 四ツ時頃、伊豆七島の内三宅島伊ヶ谷村前浜へ着岸。上陸同村に止宿。但し乗船は陸へ引上げ置。湊無し。当島迄下田湊より海路二十六里といい伝。止宿三宅島内伊ヶ谷村内前浜二軒内村会所、笹本新兵衛婦宅。当島地役人笹本新兵衛、同神主土生伊賀、其外村役人出る。

五月二〇日 伊谷村逗留

（以下、出立・逗留のみ記述）

五月二一日 伊谷村出立

（八丈島へ渡海、六月二八日迄同島測量逗留）

六月二九日 八丈島出帆、

（漂流相模国三崎湊に着岸）

七月一一日 三崎湊出帆、三宅島着岸

七月一二月 伊谷村より御蔵島へ渡海 御蔵島止宿

（御蔵島測量 逗留）

七月二一日 御蔵島より三宅島へ渡海 伊谷村止宿

七月二二日 伊谷村出立 神着村止宿

七月二三日 神着村出立 坪田村止宿

七月二四日 坪田村逗留

七月二五日 坪田村出立 阿古村止宿

七月二六日 阿古村逗留

七月二七日 阿古村出立 伊谷村止宿

七月二八日 伊谷村逗留

（神津島渡海のため、八月一二日迄逗留）

八月一二日 神津島へ渡海

資料七

三宅島の下絵図

伊能忠敬記念館所蔵

・三宅島一周

実際の長さは、「測量日記」引用

・黒崎駅より山家宿

距離 一二里一九町二六間五尺五寸(四九・二四八七四km)

梵天を立てた数 四八九箇所

梵天間の距離 一〇一m

全国で梵天を立てた数の推測値 約三九万箇所

伊谷村

梵天数 三〇ヶ所

神豆村

梵天数 四六ヶ所

神着村

梵天数 六六ヶ所

坪田村

梵天数 四九ヶ所

舟戸浜

梵天数 二六ヶ所

阿古村

梵天数 四二ヶ所

伊谷村

計

梵天の数 二五九ヶ所

島一周の距離 七里二八町六間四尺

(三〇・五五七五五km)

このほか参考迄に、次の二箇所について記す。
・東海道四日市宿より坂下宿(距離は、日本実測録。梵天を立てた数は、伊能大図の下絵図を使用)

距離 九里一二町二〇間半

梵天を立てた数 二九九箇所

全国で梵天を立てた数の推測値 約三二万箇所

・東海道水口宿より西京・三条大橋東頭(距離は、日本実測録。梵天を立てた数は、伊能大図の下絵図を使用)

距離 一二里三二町二一間半

梵天を立てた数 四一〇箇所

全国で梵天を立てた数の推測値 約三一万箇所

・熱海村より下田町

距離 二二里二七町五〇間三尺(八九・四三七一km)

梵天を立てた数 七一九箇所

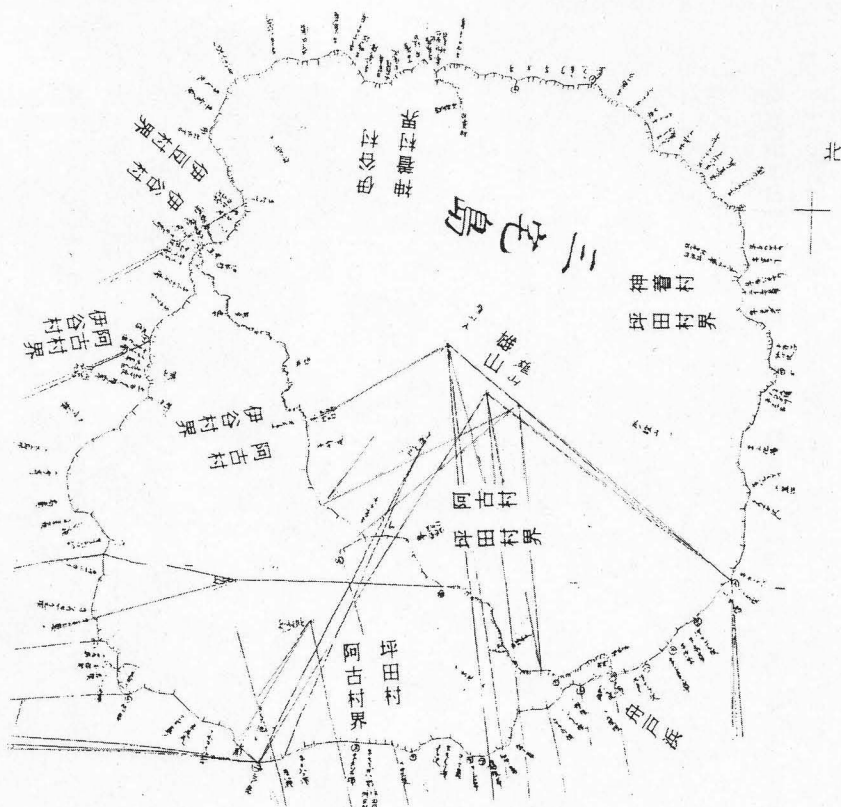
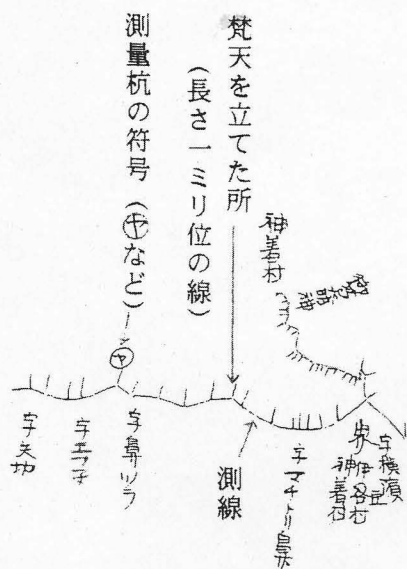
梵天間の距離 一二四m

全国で梵天を立てた数の推測値 約三二万箇所

これらの数値から、伊能測量隊の梵天間の平均距離は、百メートル

伊能忠敬が、測量関係の沢山の記録を残してくれたので、私たちに未知のものを知ることの喜びと夢を与えてくれる。
梵天を立てた箇所もそのひとつである。

○三宅島神着村付近の下絵図



名著『伊能忠敬』―その時代と人脈(二)

前田 幸子

渡辺洪基―地学協会の創設者・国家学の伝道師

伊能忠敬の記念碑建設にあたって東京地学協会の幹事として事業を推進したのが渡辺洪基である。

渡辺洪基(一八四八―一九〇二)は越前武生の医者の子として生まれ、箕作麟祥に英語を、福沢諭吉の慶應義塾で洋学を学び、一八七一(明治四)年外務省二等書記官として岩倉使節団に随行。帰国後の一八八五年、三七歳で東京府知事、一八八六年、三八歳で帝国大学の初代総長、その後、オーストリア公使、貴族院議員などを歴任した。

渡辺はオーストリアの駐在書記官をしていた時にウィーン地理学協会会員となり、国の発展における地学的重要性を知って日本にも地学を専門とする機関が必要であると痛感、帰国後の一八七九年に榎本武揚や元英国王立地理学協会会員である鍋島直大らとはかって協会の設立した。渡辺は地学協会のみならず、「府下ノ學術協会一時殆んど君ノ管理ニ属セザルモノナク、三十六会長ノ称アルニ至ル」と伝えられるほど多くの団体に関わり、学術行政に辣腕を振るったといわれる。

遺功表の設立事業については、渡辺は大島圭介・大倉喜八郎・福地源一郎・渋沢栄一とともに出願者となり、東京府知事あてに明治二〇年(一



八八七)六月三〇日付で出願、八月十七日付で許可された。許可後、二年の期間をかけて工事が完成、明治二十二年十二月の徐幕式に至る。遺功表建設には苦勞があったようで、四月十三日の忠敬の命日に除幕式を挙行すべきところ、半年以上も遅れた。建設の経緯と会計の収支について、同年十二月十四日付で渡辺が幹事として報告している。

渡辺は伊藤博文の立憲政友会の創立にも参加するとともに、伊藤の主張する国家学会の創設に関わった。国家学会は「国政知」の形成すなわち学問による国政の基礎づけという理念に基づいた研究団体であり遺功表の出願と同年の一八八七年、渡辺が学長を務める帝国大学内に創設された。渡辺は明治という新しい国家体制にふさわしい「治国平天下ノ学」としてヨーロッパ流の政治経済学を志向、政治エリート養成に「本邦ノ歴史地学及統計ヲ」利用しようとしていた。すなわち西欧諸国と伍していける強力な国家の形成、そのための人材の育成を切望していたのであり、伊藤とは理念を共有していたのであった。国家学会のオーガナイザー、イデオログとしての渡辺の働きは目覚ましいもので、「国家学の伝道師」と形容すべきものだったといわれる。

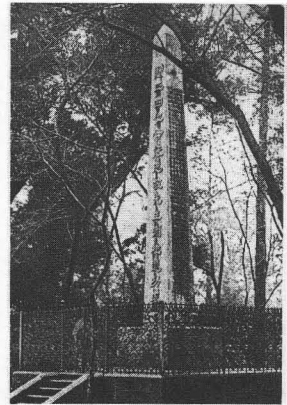
渡辺の死に際して地学協会は「氏ハ実ニ学者、実業家、政治家ノ間ニ介在シ、相互ノ意志ヲ疎通シ、統一シ、以テ地学研究ヲ一定ノ方向ニ進捗セシムルニ於テ、最モ適當ノ人タリシナリ」と、その功績を讃えている。

東京地学協会―遺功表建設に四、三九二円集めた貴顕の団体

伊能忠敬の記念碑の建立にあたって佐野常民が演説を行い、また建碑の費用を集めた東京地学協会とはどのようなものであったか。『東京

『東京地学協会報告』所収の「東京地学協会規則」前文に述べられた設立の趣旨を引用する。

「現今地學ノ用日月多キヲ加ユルノ形勢ニ當リテ同心協力以テ此學ノ進歩ヲ謀ルノ道ナキヲ憂ヒ明治十二年二月廿二日鍋島直大岡護美榎本武揚



赤松則良花房義質、渡辺洪基、北沢正誠桂太郎、堀江芳介柳猶悦梶山鼎介伴鐵太郎黒岡帶刀曾根俊虎等上野公園内精養軒ニ集會シ本會設立ノ主旨ヲ議シ鍋島直大岡護美渡辺洪基桂太郎北沢正誠ヲ撰ンテ規則立案ノ委員トシ北白川宮三品能久親王殿下ヲ推シテ社長トシ……左ノ規則ヲ設ケ東京地學協會ヲ設立スルヲ議決ス」と書いてあるが、大変読みにくい。この協会は社団法人として現在も続いており同協会のホームページに「東京地学協会の沿革」という文章がある。設立当初の原文とは異なるが、分かりやすいのでここに引用してみる。

「東京地学協会は、地学の総合的な発展ならびに普及を主な目的としております。明治の初期、外交官としてヨーロッパに駐在していた渡辺洪基、鍋島直大、長岡護美、榎本武揚の四氏が、ウィーン、ロンドン、サンクトペテルブルクの各王立地理学協会の会員となり、地学が国の発展に大いに貢献していることを見て、文明開化を急ぐわが国にもこのような協会が必要である、と痛感しました。帰国後、諸氏は桂太郎、花房義質と共に創立委員となり、また赤松則良、北沢正誠、佐野常民、塚本明毅、福沢諭吉、福地源一郎、山田顕義を幹事、北白川能久親王を社長に、一八七九（明治十二）年四月十八日に東京地学

協会を創立しました。このように、初期の下院は政治家、外交官、軍人、貴族で構成されておりましたが、わが国に地学の専門家が育つにつれて、地学者が運営にあたるようになりました。したがって初期には能久親王、載仁親王、榎本武揚、徳川頼倫、細川護立氏などが会長を務められ、研究者が会長に就任したのは一九七〇年以降です。（略）」

「東京地學協會規則」前文に続き、「本會設立ノ目的」として次の五項目を掲げる。（カタカナをひらがなに直した）

第一 地学に於いて経済軍務其の他關する有益なる事件の發明本会の見聞に触れる者あれば時々簡便の方法を以て之を編纂出版して社員ノ講究に供し及び公衆に報知する事

第二 内外古今地学ニ關する書籍航海日記紀行の諸書類器械地圖海図地誌其他探訪録本社に寄附せる者并に各人所有の有益なる者を集め一文庫を設け之に備へ置く事

第三 探訪旅行に従事し又は其地の旅行人にして地学上の探訪を為さんと欲する者に本会に於いて経歴ことを要する地方其地方に赴くに最便利なる方法深く探偵せんことを欲する事物特に採蒐せんことを欲する博物学の事物及び地学の進捗に益ある報告等本会の希望する条件を簡略に筆記し心得書を作り之に付托する事

第四 各国に在る地学協會及び地学を研窮する外国人及び内外外国に散居せる我學士等と地学の事に就き文書往復する事

第五 地学の進歩發明等に効績ありし人に賞牌其の他相當の褒賞を与へ之を勸奨する事

この五つの目的に照らしてみると、伊能忠敬の顕彰事業は地学協会の事業として大変ふさわしいものであったということができよう。

この協会が、実はたんなる学術団体ではなかったことは渡辺洪基の項でも述べたが、最も特徴的なのはその豪華な顔ぶれである。創立日すなわち明治十二年四月十八日入社 of 著名なメンバーを次に掲げる。北白川能久親王 鍋島直大 榎本武揚 渡辺洪基 長岡護美 花房義質 桂太郎 松平慶永(春嶽) 福沢諭吉 福地源一郎 谷干城 大山巖 佐野常民 副島種臣 大隈重信 井上馨 山縣有朋 大木喬任等々。幕末・明治の貴顕の名前がずらりと並んでいる。その年のうちに伊藤博文やアーネスト・サトウら幾人かの外国人の名前も加わった。当時においてきわめて地位高く富裕な人々の団体であり募金も容易であったといえよう。佐野常民は演説の場所としてこの会を選び、その結果、宮内省から百円の下賜を受けたほか、四、三九二円という多額の寄付を集めて所期の目的を達することができたのである。

北白川宮能久親王―東京地学協会初代社長になった異色の宮様

佐野常民による伊能忠敬への贈位ならびに記念碑建立運動の中心となった東京地学協会の当時の社長は北白川宮能久親王であった。

北白川宮能久親王(一八四七―一八九五)は伏見宮家の出、明治天皇の叔父にあたる。寛永寺貫主・日光輪王寺門跡を継承し「輪王寺宮」と称されていたが、徳川慶喜の依頼によりその助命を陳情。また寛永寺に立て籠もった彰義隊に担がれ、のちには奥羽越列藩同盟の盟主に擁立されて榎本武揚率いる艦隊で仙台へ北上、新政府に対抗したという異色の経歴をもつ。戊辰戦争後、許されてプロイセンへ留学するが当地でドイツ貴族の未亡人との婚約を発表して問題となり帰



国、京都で謹慎生活に入る。帰国は一八七八年七月のことであり、東京地学協会社長就任はその翌年四月のことである。能久親王が初代社長に推挙された理由は明確ではない。榎本との関係が考えられるほか、二年後に獨逸学協会の初代総裁にも就任していることからみて、留学経験のある国際派の親王であることが重視されたと考えられる。

能久親王自身が伊能忠敬についてどのような関心をもっていたかは不明であるが、これら顕彰事業に対して寄与するところが少なくなかったのは確実であろう。親王の名前でなされた上奏文は重々しく扱われたであろうし、宮内省から金百円が下賜されたことについても親王と何らかの関連があるのではないかと考えられるからである。

榎本武揚―箱田良助の二男にして東京地学協会副社長・大臣

同じく東京地学協会の当時の副社長は榎本武揚(一八三六―一九〇六)、すなわち伊能忠敬の内弟子・箱田良助(通称・佐太夫)の二男であった。佐野常民も東京地学会における演説のなかでその点に言及し、「榎本武揚氏の如きは、先考(亡父)佐太夫君その門下の逸材なるをもつて、今日これを説く人に適すといえども、余はその主唱者たるをもつて、氏等の勸むるところとなり、敢えて諸君に演述せん。」と、本来は榎本がこの演説をするに相応しい人物であると述べている。

榎本がこの贈位・碑設立にどのように関与したのかは詳らかではないが、あまり積極的に動いた形跡は見当たらない。父親の顕彰ともとられかねない行動はあえて慎んだのであろうか。いずれ、能久親王と榎本武揚という明治政府に対して微妙な立場にある人物が社長と副社長に就任しているのは興味深い。



菊池大麓―教科書の国定化を断行した伝説の大秀才

遺功表の設立は伊能忠敬の名を明治の世に広めることとなった。しかし、忠敬の名が全国的に知れ渡るようになったのは教科書に載るようになってからである。

伊能忠敬の国定教科書「修身」へ登載は明治三十七年（一九〇四）に始まり、昭和二年（一九四五）まで続いたが、教科書の国定化を断行したのは当時の文部大臣・菊池大麓であった。



菊池大麓（一八五五―一九一七）は洋学者・箕作秋坪の次男として江戸に生まれ、父の実家菊池家の養子となる。数学者、東京帝国大学総長、文部大臣、枢密院顧問官、貴族院議員。男爵。墓所は谷中霊園。

菊池大麓は明治期の教育行政の分野で大きな影響力を発揮し、その結果伊能忠敬の顕彰にも大いに寄与することとなったが、この人物及び教科書について述べるに長くなるので、稿を改めることとしたい。

三井八郎右衛門高棟―帝国学士院に二千元寄付した三井財閥の総領

修身教科書で伊能忠敬の名の知名度は上がったが、科学者としての忠敬の実像は知られていなかった。長岡半太郎は忠敬の業績自体を顕彰すべく帝国学士院（菊池大麓院長）から『伊能忠敬』を刊行することとを企図した。これに対して金二千元を寄付したのが三井高棟である。

三井高棟（一八五七―一九四八）は三井家一〇代目の当主。三井家の当主は代々八郎右衛門を名乗った。

三井家は、伊勢・松阪の商人三井高利が江戸に創業した越後屋三井呉服店（三越）で「現銀掛値なし」と当時としては画期的商法でまた

たく間に成功し、両替商を兼業、幕府御用商人となる。維新後も新政府の政商として事業を拡大、日本最大の財閥となった。高棟は團琢磨とともに三井財閥を統括するかたわら、三井家の迎賓館として三井綱町倶楽部を建設、幼児教育のため「若葉会幼稚園」を設立、また国宝の茶室「如庵」を取得するなど文化・芸術の分野に関心を示した。自身も大磯の邸宅内に城山窯を築いて作陶に励み、芸術的才能を発揮した。高棟の伊能忠敬への関心がどのようなものであったかは不明だが、『伊能忠敬』刊行のために寄付した二千元は現在の数億円にあたる。

團琢磨―長岡半太郎の師・長男に「伊能」と名付けた三井の大番頭

『伊能忠敬』出版に関心を寄せたのは、三井財閥の総領の高棟よりもむしろ大番頭・團琢磨のほうだったと思われる。

團琢磨（一八五八―一九三二）は福岡藩士・神屋宅之丞の四男に生まれ、十二歳で團尚静の養子となる。藩校修猷館に学び、明治四年、十四歳の時、海外留学生として岩倉使節団や津田梅子ら留学生らと渡米。そのまま七年間留学。マサチューセッツ工科大学で鉱山学を学び、卒業とともに帰国した。帰国後、東京大学の星学（天文学）助教授となるが、専門の鉱山学の知識を生かすべく工部省に移り、三池鉱山局技師となる。その後、鉱山が政府から売却されたのとともに三井に移り、一九二八年三井合名会社理事長として三井財閥の総帥となる。以後、名実ともに日本経済界の総領となるが、一九三二年右翼団体血盟団により暗殺された。墓所は護国寺。

さて、その伝記『男爵團琢磨伝』によると、鉱山学を学んだ團が星学（天文学）助教授となったのは、就職難の中での行きがかり上のこと。専門外である團の就任を理学部長・菊池大麓が承認して実現した。

注目すべきはこのときの教え子に長岡半太郎がいたことである。後年まで交渉があったという長岡らの追懐によると、若き團助教授は学生と「友達半分に打ち解けて親しく天体観測の製図などした」ということである。團は四年間の在職中天体観測を行い、のち工部省に転じた。

もうひとつ注目すべきは、團が自分の長男に「伊能」と名付けていることである。前掲書によれば、「長男伊能は三人目に始めて得た男の子なれば日々自ら抱きかゝへてお守りをするを楽みとした。」とある。希望の男子、その大切な長男に團琢磨は「伊能」と名付けたのである。

團伊能は明治二五年（一八九二）大牟田生まれ。東京帝国大学文学部哲学科美術科卒。東京帝国大学文学部助教授（西洋美術史）。のち参議院議員、プリンス自動車社長、九州朝日放送会長。男爵。著書に『概観欧州美術史』『伊太利美術紀行』『パルナスの巡礼』等がある。

團伊能の長男が作曲家・随筆家として著名な團伊玖磨（一九二四—二〇〇一）である。伊玖磨の「伊」の字は父・伊能の一字を承けたものである。團琢磨が長男に「伊能」と名付けた理由は不明である。

次男の勝磨（一九〇四—一九九六）については「次男勝磨は明治三十七年十月十六日に生れた、恰も其時沙河戦争の勝報を得たので勝磨と命名した。」と明確な記述があるだけに残念である。團勝磨は「ウニの発生」で著名な生物学者で東京都立大学総長を務めた。『伊能忠敬の科学的業績』の著者・保柳睦美とは同じ理学部所属であり教授会等で度々同席したはずである。両者は伊能忠敬について語り合ったことがあっただろうか。

つづく

（まえだ こうこ・地方公務員）



【参考資料】

『ドイツ国家学と明治国制』

『彰義隊戦史』

『男爵團琢磨伝』

※画像資料

渡辺洪基 北白川宮能久親王 榎本武揚 菊池大麓 團琢磨

伊能忠敬旧遺功表

『幕末・明治・大正・回顧八十年史』所収
『伊能忠敬』・岩波書店 所収

瀧井一博著 ミネルヴァ書房

山崎有信著 隆文館

故団男爵伝記編纂委員会編・刊

落花生ボッチ 江口俊子

晩秋、千葉県山武市、富里市、八街市のいたるところでボッチの風景が見られる。雨よけを昔ながらの菰こもで作ったボッチは風情があるが、この畑にはおばあちゃんが作った緩くてずんぐりとしたボッチたちが青いビニールを被せられて並んでいる。
新年には落花生の新豆が出回る。





伊能塾

第四回例会（十月十八日実施）再録

○講演二「大野弥三郎の墓を訪ねて」 講師・鈴木純子さん

一、荻原哲夫さん作成のCD「あつ！と驚く弥三郎」

今回は昨年の九月に急逝された荻原哲夫さんの「あつ！と驚く弥三郎」という標題のCDをご紹介します。これは荻原さんが第一回目の伊能塾のときにお持ちになったデータをCDに入れたもので、内容は伊能忠敬が使用した観測機器を製作したことで知られる大野弥五郎のりちか規貞のりちかの、その孫にあたる弥三郎規周のりちかのお墓を訪ねた際の記録です。ご存じのように大野家は三代続いた精密器械師の家柄で、初代の弥五郎は息子の弥三郎規行のりちかとともに伊能隊出立の見送りに来ていたことが『測量日記』に見え、また規行も『忠誨日記』に頻繁に登場します。

二、大野弥三郎規周という人物

弥五郎の孫・弥三郎規周のりちか（一八二〇—一八八六）は榎本武揚らとともに幕府派遣留学生としてオランダに留学、帰国して福井藩や幕府海軍で器械技術の指導にあたり、のちに大阪造幣局技師となりました。

息子の大野規好の名で時事新報に出された規周の死亡記事が残っていますが、「葬儀ハ大坂ニテ執行ス」と記しており、規好の住所が小石川の長谷川皎方となっています。この住所が規周が仕えた福井藩主・松平春嶽の屋敷の中であり、長谷川皎方という人が元福井藩士であることから、福井藩時代の同僚かと思われます。また、松平春嶽は懐中時計の愛用者で、上京に際し「十二時十三分發。」等と、時刻入りの日記を書いていましたが、これも大野規周との関係が伺われる話です。

三、弥三郎規周の大きな墓

弥三郎規周の墓は大阪市の北霊園にあります。息子の大野規好が建立したものでオベリスク型の、管理事務所前からすぐわかったという高い墓碑です。あまりに大きいので、荻原さんは「あつ！と」驚かれたようです。日影の長さ四・八m×四・九m、すなわち一丈六尺でいわれる「丈六」の高さと推定されます。グーグルアースで調べた画像が入っていますが、墓地の中に規周の墓の日影が長く延びています。この墓碑と旧伊能忠敬測地遺功表とは形が似ており、明治二〇年代頃の流行だったのかもしれないという感想を書かれています。

以上、荻原さんが作成されたCDの内容をご紹介します。

なお、このCDの内容はインターネットの同名のブログとしてアップされており、そちらでも見ることができます。

（了）

大野規周の死亡記事（時事新報）

○叙任

○十月六日

非職元大藏三等技師從六位勳六等
特旨ヲ以テ位階被進叙正六位

大野 規周

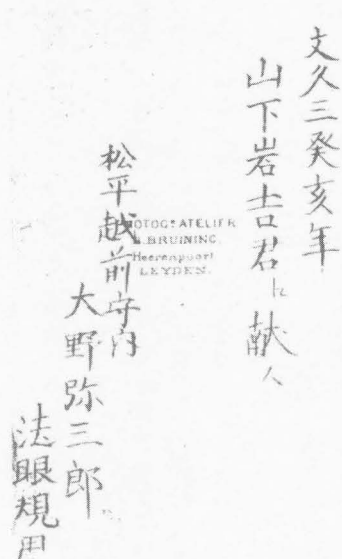
實父規周此地ニテ病氣ノ盛發生不叶去ル五日死去ス
葬儀ハ大坂ニテ執行ス此段同人等知諸君ニ報ス
小石川氷道町卅五番地長谷川皎方

大野規好



明治20年代頃の流行？
(旧伊能忠敬測地遺功表
1889明治22年頃)

あつと驚く弥三郎！大野規周の墓
オパリスク型で大野規好が建立(大阪市北霊園)



宮永孝著「幕府オランダ留学生—職方・大野弥三郎」による

8. 大野弥三郎の肖像と署名(三崎ユキ氏提供、宮永孝所蔵)

福井藩の松平春岳は懐中時計の愛用者

大野弥三郎規周は松平春嶺/慶永に仕えてから訪欧した。

大野弥三郎規周の肖像と署名(三崎ユキ氏提供、宮永孝所蔵)

第七回 「伊能忠敬献花の集い」 開かれる

石川清一

一、献花の集い・式典

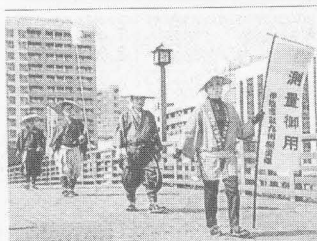
去る十月十九日、例年九月に行われている「献花の集い」が、今年
は「地図展 in 北九州」（伊能忠敬九州測量開始二〇〇年記念）が開催
されるのに合わせ、その初日に行われた。当日は汗ばむほどの秋晴れ
の下、中央から地図展開会式についての国土地理院・小牧和雄院長、
地図展推進協議会・野々村邦夫会長、当伊能忠敬研究会・星埜代表理
事、地元北九州市長他各来賓、市・商店街関係者、顕彰会関係者等多
くの出席者により盛大に挙行されました。式典は、旅装束を着た地元
街づくり団体の四人が扮した伊能忠敬御一行が、太鼓に合わせ木（造）
の橋、常盤橋を渡って来るパフォーマンスで開幕。亀吉正明顕彰会々
長の挨拶、来賓の祝辞に続き、伊能洋・陽子様ご夫妻からの心のこも
った祝電が披露された後、出席者全員が一人ずつ菊の花を記念碑前に
献花しました。

二、星埜代表理事と九州支部との懇談会

「献花の集い」終了後の夕刻、代表理事ご来港の機に役員と懇談の時間を持ちました。星埜代表からの目下の活動等を伺い、私から九州支部の現況報告、本部総会への希望等や若干の意見交換を行いました。折から急浮上している「佐賀と伊能忠敬との関係」に話題が及び、一つは佐賀の偉人で日本赤十字社の創設者で、明治期に伊能忠敬の贈位運動を推進した（この事は佐賀では知られていない）佐野常民と伊能



左・挨拶する穂吉・正明・伊能
忠敬小倉顕彰会々長
下・「献花の集い」を報じた西
日本新聞（十月三十日）



今年、伊能が九州の測量を開始してからちょうど200年目。近代的なビル街の一角に出現した測量隊に、参列者から「近代化の礎を築いた開拓精神を今こそ見習え」の声も。

(北九州)

4/4、10/30 西村 伊能忠敬

超短波

江戸時代、日本全土の実測地
図を初めてつく
った伊能忠敬の
功績をたえる「献花
の集い」が29日、九州測量
の出発地とされる北九州
市小倉北区京町の常盤橋
のたもとで開かれた。市
民ら約70人が記念碑に菊
を手向へ、地元街づくり
団体の4人が伊能の九州
測量隊に扮して、にぎや
かに橋を渡った「写真
・地元住民などてつくる
「伊能忠敬小倉顕彰会」
が、この日始まった「地
図展2009 in 北九州」
（同区船場町の井筒屋
本店）に合わせて催した。

(いしかわ せいいち・九州支部長)

家。もう一つは伊能測量隊の佐賀入りを迎えた佐賀藩土山領主馬場星塾（代表理事）家。それぞれ関係があるらしい事を聞き、思わぬ繋がりについてびっくりしたところです。発端は、会報『伊能忠敬研究二〇〇九年第五七号』（六六頁以下）の前田幸子編集長の記事に佐賀の会員・馬場良平氏が注目し、前田さんと東京の先生方の協力を得てわかったようです。更に、調査している段階で今後の進展が待たれます。



「地図展 2009 in 北九州」

主催：地図展推進協議会
後援：国土交通省国土地理院
特別協力：伊能忠敬研究会九州支部
伊能忠敬小倉顕彰会
小倉井筒屋
(株)ゼンリン

伊能忠敬九州測量開始200年記念

「地図展 2009 in 北九州」開催される

石川 清一

毎年、国土地理院（今年から地図展推進協議会）他主催の「地図展」が、今年は伊能忠敬九州測量二〇〇年記念に合わせ北九州市「小倉井筒屋」百貨店を会場に十月二十九日～十一月一日迄開催された。特別協力として当九州支部も伊能図コーナーの説明要員として期間中連日二～三名が協力、活躍した。会場には伊能大図の九州部分や、北九州市の変遷を示す昔と今の地図、月の地形図等が展示され、又、近くのゼンリン地図の資料館で「地図教室」が開催されるなど、子供も大人も楽しめる企画で連日盛況でした。尚、地図展初日には、会場に近い小倉常盤橋・伊能忠敬記念碑前で恒例の「献花の集い」式典も行われた。

※ 地図展説明員で協力頂いた方―野田、河島、井上、熊谷、中富、国重―の諸兄に御礼申し上げます。

（いしかわ せいいち・九州支部長）

200年前の佐賀を歩こう！16畳大の伊能図初公開
佐賀県立図書館蔵『伊能大図』を一般公開

馬場 良平

本をテーマにしたまちづくりイベント『BOOKマルシェ佐賀2009』の一環として、佐賀県立図書館が所蔵している「伊能大図」の一般公開が十一月十五日、佐賀市にあるエスプラッツ二階展示スペースで行われた。今回が県内初公開となる同図書館蔵『伊能大図』の十六畳大の地図の上を歩いて見学できる催しで、これまで展示が困難だった地図を公開する「ちょうど良い機会」として「BOOKマルシェ」への協力展示が決まったもの。フロア展示のほか『測量日記』全七巻の展示、佐賀県域での伊能測量についてのパネル展示なども行われ、佐賀県や佐賀県立図書館のホームページ、朝日新聞の北九州版等でも報道された。伊能忠敬が佐賀でもっと知られる契機となることを期待している。

（ばば りょうへい 塚崎・唐津往還を歩く会事務局長）

【七〇頁に関連記事】



今回展示された国土地理院所蔵「伊能大図（米国）彩色図」の一部・有明海沿岸

新潟支部だより

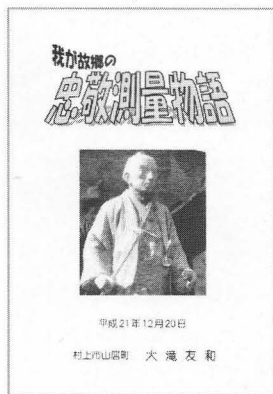
大滝教頭先生『わが故郷の忠敬測量物語』

垣見 壮一

「越後平野も霜枯れ県境の山々は白銀に輝いています。伊能測量隊が第四次測量で群馬県境三国峠を越えたのが旧九月二十九日、十一月一二日。天候には恵まれた様ですが、例年冠雪一〇月の越後山脈での測量作業の苦勞が忍ばれます。

会報第五一号に記載の新潟県村上市の大滝先生から、冊子『わが故郷の忠敬測量物語』をいただきましたので同封します。山形県境に位置する北国の海辺の町で教材を作成し、生徒に測量を実施した努力と情熱に、小生も敬意をもって大切に交際しています。・(略)・
新潟支部から編集部にお便りと冊子が届きました。ご存じ「歩測教頭先生」こと村上市立上海府小学校の大滝友和先生がこれまでの研究成果をまとめ、『忠敬測量物語』と題して刊行されました。

目次からその内容を紹介すると、第一章 測量体験学習、第二章 忠敬測量の足跡、第三章 伊能忠敬の生涯、第四章 資料となつていきます。なかでも第一章の児童たちによる伊能測量法と地図作りの実地体験の記録は、他に例をみない貴重なものです。編笠姿の教頭先生



と伊能隊の測量体験を、子供たちは一生忘れることはないでしょう。また第二章は享和二年(一八〇二)第三次測量時の伊能測量隊の地元での足跡を追跡した価値ある地域資料となつていきます。(編集部)

(かきみ そういち)

発刊のことは

謹啓(略)およそ一〇年間、伊能忠敬の一生や全国測量のことを調べたり、聞き取り調査をしてきました。冊子にまとめようと考えたのは、上海府小学校に異動した年に、六年生と測量体験学習を行ったところです。その後、五年かけて少しずつ原稿を作つて出来上がりました。(略)

この冊子は決して私一人の力ではありません。測量体験学習でお世話になつた佐藤巧さん、伊能図などでご助言いただいた垣見壮一さんなど、たくさんの方の御支援とご協力があつてこそ完成したものです。私事ですが、平成二二年三月をもつて定年退職いたします。(略)私の目的は小学校の歴史授業に、郷土の歴史を生かすことでした。冊子作りはその副産物にすぎません。(略)さて、去る一〇月五日、

父・博が八二歳の命を閉じました。人に対する謙虚さと芯に秘めた強さを教えてくれた父でした。私の冊子作りには最大の理解者だったのです。謹んで、本冊子を亡き父に捧げます。敬白
平成二二年一月二日吉日 大滝友和

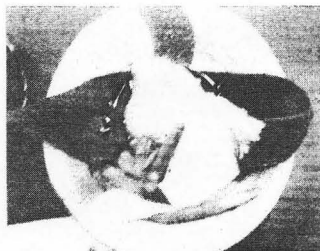
3 府屋・又左衛門家

又左衛門家は府屋の信号の角に立つ大きな造作のよい建物である。先代当主は又春氏。先々代当主は富樫又太郎氏。

又太郎氏は富樫産業という木材総合会社を興して財を成した。政治家を志して山北村議員となり、昭和30年代の新潟県議会議員を三期務めている。又太郎氏で筆者が最も興味をもったのは、鵜泊・芦谷間の道路工事である。又太郎氏は県北岩船郡の社会基盤を強化するため、県議会段階で努力と活躍をした。その情熱の一端を、『山北村公民館報・第5号』[昭和31年2月10日発行]にみることができる。



【府屋・又左衛門家】



測量隊の朝食を再現：岩船特産「やわらか麩」の料理

忠敬談話室

①

■安積疏水の標石発掘

須賀川市在住 松宮輝明さん

戸ノ口「水量基点」標石

須賀川市在住の松



水量基点

安積疏水猪苗代湖水量標ハ是ヨリ百二十八度二当リ十間ノ湖中ニシテ本標頭ヨリ低キ一五尺一寸五分ヲ以テ六尺二寸ノ定水トス此基点ハ農商務省建設ノ水量標ノ変動スルヲ恐レ之ヲ建者也明治廿七年十一月十日

安積疏水の標石発掘

須賀川の伊能忠敬研究会員

松宮 輝明さん



湖面の高さ定める

明治政府「変動恐れる」記述も



須賀川市の元高校教師で伊能忠敬研究会員の上で、水量を變動させないよう促す明治政府の松宮輝明さんへなら

は、会津若松市河東町八田にある安積疏水・水量基点の標石を發掘し、内容を調べた。結果たす十六橋の西岸にある。開拓に尽くした松宮さんは、伊能忠敬の足跡と関連して県の測量地点を調べておき、標石研究家の浅野勝宜さん（宮城県大崎市・畠山未津留さん（仙台市）と共に、會津若松市河東町八田にある安積疏水・水量基点の標石を發掘し、新聞で報道されました。

發掘された標石を調査した結果、明治政府の農商務省が水争いを防ぐ目的で湖面の高さを定めた数値基準と、水量を變動させないよう促す明治政府の考えが刻まれていることが分かりました。

須賀川市の元高校教師で伊能忠敬研究会員の上で、水量を變動させないよう促す明治政府の松宮輝明さんへなら

松宮さんは伊能忠敬の足跡と関連して福島県内の測量地点も調べており、「文化財としてしっかり残すべき、貴重な資料だと思う」と話しています。

（「福島民報」八月二三日）

■所沢市民大学「佐原町巡り」講師体験記 井上靖子さん 所沢在住

去る九月十五日、所沢市民大学十四期・十六期生その他の方々のバス二台を連ねての佐原バスツアーが催されました。その際講師として妹・伊能陽子が招かれて居たのですが、あいにく体調を崩し急遽八十七歳の私にお鉢がまわって来ました。目を白黒させました。が、ここは交替するべきと思うことに致しました。

妹は気の毒がつてあれこれと資料を用意してくれました。お陰でどれだけ助けられたか感謝して居ります。

用意してあった妹の「御縁がありまして・・・」の原稿と忠敬の家訓（そのまま）に訳文をつけたものとを全員にお渡ししました。

「御縁がありまして・・・」には、母の遺句にはじまる初期の記念館落成の様子、佐原での祖母の説明（来観者への）の日々、包み紙として無造作に扱ってあった地図の下書きの話、下書きなど読み解く難しさの為、古文書の勉強をはじめた話など記した一文でした。更に一寸した話題にと忠敬が養子に入った頃のこと、伊能七家のこと、次々と他界された四人の妻のこと、また伊能家の当主としての役目の中でも一つ天明の大飢饉の時の臨機応変の乗り切り方など、話題を更に追加してくれました。それに加えて、私が子供の頃、外地から夏休みに帰った折は、見学者が見えるとソレツと祖母の手伝いに駆け出し、拡げる地図を下で支えたり、芳名録に署名を頂く為の墨磨りを神妙にしたり、見学者が帰られると量程車や羅針盤を床の間に戻したりした思い出もお話しました。

また忠敬は娘に留守中のことも細々指示し、漬物の具合までどうか、など、測量の合間のそんな心遣いがあった話なども交え、バス二台を乗り換え、同じ様なことを訥訥と冷汗をかき乍ら、何とか過ぎさせて頂きました。

佐原に入ってから街並案内人の吉田さんと新井さんがバトンタッチして下さりホッと致しました。館内は吉田さんがマイク片手に張り切って説明されていました。皆さん満足された様でした。

記念館では豊田館長はじめ青木氏、紺野氏とも親しくご挨拶をさせて頂き、ゆつくり寛がせて下さりホッといたしました。どんなに有難かったか感謝して居ります。

ジャージャー橋では忠敬の歩測七十^{センチ}糶と同じ歩数で渡れるかと、皆さんはしゃいで居られました。旧宅も各々ゆつくり廻られ、薪倉、炭小屋、味噌倉、つるべ井戸のあった話など折々ませて一緒に廻りました。

私にとりましては、お盆の真最中ここで長男の誕生（しかも終戦記念日に）を得たこともなつかしく、戦後地方に出た折、主人のみ東京へ戻れ家族は保留となった為、親子三人祖母の世話になり、祖母が次男を背負い危なく小野川に落ちそうになった事。長男が三輪車ごと柳の下の用水路の橋から落ちたことなど走馬灯の様に思い出されました。

その後小野川沿いの散策・買物をへてバスで観福寺へ。二班に別れ忠敬の墓参、観福寺の立派さにも各自感歎の声をあげて居られました。

お陰様で私も祖父母・父母・敬に久々に線香を手向ける幸せも得られました。

皆さん満足した後、一路所沢へと戻りました。とても陽子さんの替りはつとまりませんでした。鈴木理事は満足して下さった様で、いささかほっとした一日でありました。（了）

【編集部注・井上靖子さんは六代目伊能康之助氏長女、洋氏の姉上】

9月15日 日帰りバス旅行

佐原の町並みめぐり

【スケジュール&コース】

所沢駅出発(8:30) — JR東所沢駅經由関越道所沢I/C — 東京外環道 —
東関東自動車道 — ホテル日航成田(昼食) — 東関東自動車道佐原香取I/C —
佐原町並みめぐり(伊能忠敬旧宅見学・伊能忠敬記念館見学・小野川沿い散策) —
観福寺参拝(伊能忠敬の墓) — 帰路 — 所沢駅解散(18:00)

暑くも無く寒くも無く、絶好の散策日和に恵まれ、会員のご家族及び、市民大学の受講生の参加もあり、総勢78人が2台のバスに分乗して楽しい一日を過ごしました。

- バス中では所沢市在住で伊能家直系の井上靖子さんから伊能忠敬に関する手作りの資料配布と貴重なお話を聞かせていただくことが出来ました。(紹介者の鈴木理事に感謝！)
- 昼食は成田空港近くのホテル日航成田での豪華バイキングで大いに飲食し、話も弾みました。出来たての料理を頂き、デザート(果物・ケーキなど)から各種飲み物もあり、シニア料金ということもあって、充分に元が取れました！
- 佐原の町並みめぐり及び、伊能忠敬の墓がある観福寺参拝ではボランティアの町並み案内人の吉田会長と新井さんに懇切丁寧なガイドをしていただき、楽しさも倍増でした。
 - ・佐原の江戸時代の街並みは、柳並木の小野川沿いに大事に保存されておりました。
 - ・伊能忠敬記念館での「忠敬が50歳を過ぎてから天文・暦学の勉強を始め71歳まで全国を測量して歩いて我が国最初の日本地図を完成させた」バイタリティーには驚かされました。



井上靖子さんと紹介者の鈴木理事
"ありがとうございました"



小野川沿いの江戸時代の町並み
柳の並木も風情がありました

お世話になった町並み案内人の
吉田会長と新井さん



■間宮海峡発見二〇〇年祭の報告

茨城県つくばみらい市は去る七月二六日市が生んだ江戸時代の探検家間宮林蔵の間宮海峡発見二〇〇年」を記念する二〇〇年祭を開いた。市立井田小学校体育館をメイン会場として市民による多くの出し物で賑わい、郷土の偉人を讃えた。茨城県ウオーキング協会はこの日古河市で役員会を開いたため、朝からの参加はできなかった



林蔵太鼓も上演された

川上 清さん水戸市在住

が、会議終了後雰囲気でも味わいたいと水戸歩く会四名が林蔵記念館及び会を聞くに止まった。



茨城新聞 2009.7.27



常陽新聞 2009.8.2



忠敬談話室

④

■先祖の故郷・佐原を訪ねる 福岡県田川郡在住 奥永 渚

九月のシルバークウィークを使って、ずっと行きたいと思っていた佐原を訪ねました。

伊能忠敬と先祖・琴の生母・妙諦のお墓参りをしました。

佐原の街並みは、江戸時代から時間が止まっているんじゃないか、と思わせるような、そんな素敵なお墓参りでした。姉も叔父もいとも一緒に参りました。皆、琴の嫁ぎ先の松田家の子孫です。

お墓参りは、市川市在住で妙諦の子孫である柏木隆雄氏に案内していただきました。伊能忠敬や妙諦のお墓を前にすると、なんとも言いえない、とても不思議な気持ちになりました。

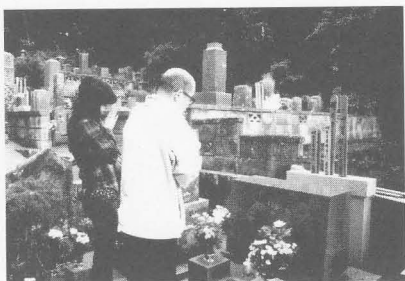
街中の伊能忠敬記念館にも寄りました。

展示物を拝観して、改めて忠敬のすごさを知りました。

今回、九州の福岡から千葉県の佐原まで遠い旅でしたが、とても思い出深いものとなりました。

◇柏木隆雄さん談「娘が一人増えたような、不思議な喜びです。」

【編集部注・奥永渚さんは伊能忠敬の三女・琴女のご子孫。琴女の母・妙諦は柏木隆雄さんのご先祖である柏木乙右衛門幸七の女。】



柏木家の墓前で 奥永・松田さん

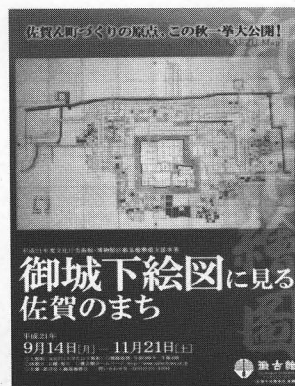


忠敬旧宅前にて 松田・柏木・奥永（右から二人目）さん

■私の主張「伊能大図歩いてみよう」

佐賀市で開催される地図展で「伊能大図」の上を歩き、伊能忠敬の偉業を体感してみようという馬場さんの主張が新聞に掲載されました。併せて佐賀市にある「徴古館」での「御城下絵図を歩こう」展も紹介し、また伊能忠敬の贈位運動を推進し、実現させた佐賀出身の元勲・佐野常民との関わりも紹介しています。

武雄市在住 馬場良平さん



「御城下絵図に見る佐賀のまち」展ポスター
博物館「徴古館」(鍋島報効会)

この秋、古地図・絵図に関する興味ある催しが計画され、歴史街道を歩く私にとって、とても楽しい秋になりそうです。

佐賀市にある徴古館の「御城下絵図に見る佐賀のまち」は、寒に面白い企画だと思います。鍋島報効会が所蔵する江戸時代の御城下絵図が見られ、これを読み解くワークショップや、「御城下絵図を歩こう」という現地探訪会も行われています。

これまでこうした絵図を見る機会が少なかつた人々がこれらを見ることで、また、絵図を元佐賀の町を歩くことによって、佐賀は城下町であったこと、佐賀には歴史と文化があるということを認識されるきっかけになり、この機運が佐賀城築城400年記念事業につながればよいと思います。

有田町歴史民俗資料館では、安政6年(1859)松浦郡有田郷

私の主張

馬場 良平(59) 武雄市

伊能大図歩いてみよう

図を元、江戸時代の有田を歩き、「新・有田皿山絵図」を作ろうという計画が進んでおり、有田焼創業400年を迎える有田の歴史を物語る企画で、大いに期待するものです。

そしてこの秋もうひとつの目玉は、佐賀市中心街で開かれるBOOKマルシェ佐賀2009の推進し、実現させたのが佐野常民

技術の正確さを体感するめったにない機会です。

「初めて日本を測った男」として知られていますが、伊能忠敬の名が広く世に知られるようになったのは、伊能忠敬への贈位がきっかけであるといわれており、それを推進し、実現させたのが佐野常民です。

賀県周知の伊能大図複製地図が公開される予定です。ビールで覆った約16畳分の広さの地図を床に広げて、その上を歩いて見学できるという企画です。

伊能忠敬の測量隊は、文化9年(1802)から文化10年(1813)にかけて、唐津藩領で佐賀藩領を測量踏査しています。ほぼ200年前の佐賀が目の前に広がる中、伊能忠敬の偉業とその測量

佐野常民が伊能忠敬の事績を顕彰したのは、なぜだったのか。長崎海軍測図所の伊能忠敬との出会いで恩恵を受けたのであろうか。文化9年(1802)9月19日、佐賀城に入った伊能測量隊を出迎えた山頭主馬と佐野常民が一族の関係にあることが、大きな理由として挙げられるのではないかと、興味を尽きないようです。

(伊能忠敬研究会会員)

「佐賀新聞」2009.11.5

馬場さんは佐賀県における「伊能測量の道」を研究しており、これまでも「伊能図で行く藩政期の道」(佐賀新聞2004.11.4)「街道・再発見 幕府測量方の本陣 伊万里道、桃川宿を行く」(佐賀新聞2008.9.17)など伊能関係記事が掲載されています。



お便りから

■白根貞夫さん(横須賀市)

拝啓 第57号の機関紙を送り頂き、ありがとうございます。今回の分につき、多少書かせていただきます。68頁に贈位のことと述べられています。添付しました資料は、富山房国民百科大辞典第7巻の抜粋であります。暦学者を順に並べてみます。

渋川助左衛門 贈従四位

麻田剛立 贈従四位

高橋作左衛門 贈従四位

間 五郎兵衛 贈従五位

伊能忠敬 贈正四位 となっています。

軍人というと、正四位は中将、従四位は少将、従五位は大佐あたりに相当します。

伊能がダントツなのは、後世に遺した地図による功績と思われます。

次の件57頁ゴロヴニンの肖像画は、写真焼きのとき、表裏反対になっています。勲章の大綬は、右肩→左腰に、副章は左肋に帯びるものが、反対になっています。(日本の金鵄勲章のみは、大綬、左肩→右腰)。(※編集部責任です。)

11頁、大沼晃さんが、神奈川県博物館、八月二日に訪問、古山芸芸員に会ったとあります。私は七月三十日、この展覧会を見にいき、古宅芸芸員に会いました。彼は私のもと勤めていた会社の上司の息子さんと、県博に行くと、時折お

会しています。この文をよみなつかしくなりました。

38頁 伊能忠敬の見た風景 自転車で忠敬さんの見た風景にふれるとは妙案ですね。しかし準備もなかなかのもの。地理感覚が優れている人だとの感がします。(略)小田原・湯河原間、車では何度か通っているが、歩いたことがない。かなり自転車ではきつい道のりでしょうね。

三浦半島をどのように走るか注目しています。頑張ってください。(※以下略させていただきます。)

■松尾卓次さん(島原市)

「図説 島原半島の歴史」(郷土出版)伊能忠敬の島原領測量を記載しました。(二七頁参照)

■加藤忠三さん(静岡市)

今月一五日地元ふるさと塾が主催し、伊能忠敬の伊能忠敬の「下図」を使ってあるくことになりました。今回の企画に際し伊能忠敬記念館の協力でインターネット上への資料の掲載を許可していただきました。今回の企画は伊能忠敬を知っていただける貴重な機会なので私も張り切っております。終点が山島方位記に載っている「清水湊川口」の場所になります。200年前に伊能忠敬が立った同じ場所に立ち、当時の小方儀を使って、彼らの測量した目標を測る体験が出来るように計画しています。下記のホームページに詳細が記載されていますので見てください。

清水ふるさと塾 <http://s-furusato.net/>

■成家淑子さん(香取市)

佐原古文書学習会は小島先生が亡くなられた後も会員達で月一回、佐原街並み交流館で『伊能景利日記』を輪読しあっています。今回三十五周年四〇〇回、小島先生なくなられて一年、小島先生への報告ということで記念文集を作成しました。



佐原古文書学習会 在りし日の小島一仁先生を囲んで

佐原古文書学習会
四〇〇回記念文集

二〇〇九年六月

お知らせ

例会報告 (第五回)

■第五回例会 (十月例会 十月十八日 (日))

○講演一「毛利本藩の伊能史料調査報告」

講師・渡辺 一郎さん (講演内容は次号)

○講演二「大野弥三郎の墓を訪ねて」

講師・鈴木 純子さん (講演内容は六〇頁)

◇今年二回目の例会は遠く北海道から参加された伊能三代さんと小林順三さんの新入会員二名を迎え、計十四名の出席者が顔を揃えました。

次回例会のご案内

■第六回例会 (十一月例会)

○日時 一月十七日 (日) 一三時～一六時

○会場 「パークコート神宮前」会議室

○内容 「歴博所蔵柏木家文書」 柏木隆雄氏

「伊能家の酒造量」 渡辺 一郎氏

会員情報

訂正 小林順三さん (相模原市) 先史地理学他

※前号入会欄の間違ひをお詫びして訂正します。

入会 岩村哲さん (京都市) ニッシャビジネス

サービス (株)

伊藤幸雄さん (取手市) 間宮林蔵顕彰会研究事

業部長 取手市郷土史研究会会長

伊能三代さん (札幌市) 介護福祉士、認知症ケ

ア専門士 趣味・写真



日々の話題

■新聞記事『中日新聞』(なごや東版) 九月一九日に『富嶽三十六景』(ここから描いた) 掲載。

【一部紹介】瀬戸市の瀬戸高校で開かれている特別企画展「富嶽三十六景」にちなみ、生徒たちが「伊能中図」再現図を作った。(略)「伊能中図」を拡大して模写した地図(四六×六六)に紙粘土で作った富士山を配置。当時の村などの地名を書き込んだり、四十六枚の各地点を示したりした。



「伊能図」模写し説明

■雑誌記事 シテイケーブル周南発行「月刊まるごと周南」No.020に「保存版・周南の地図を作った男たち」朝倉南陵と伊能忠敬。」が掲載。

【一部紹介】忠敬の地図作成に南陵が協力し、徳山藩の先見の明と南陵のバックアップでスムーズに行われた防長の測量。：今年の3月



10日、海上保安庁徳山支部が所蔵の伊能図模写図：の複製図を周南市に贈った。

伊能忠敬記念館

☎0478・54・1118

第65回 収藏品展

期間 1月26日(火)～3月22日(月)

展示品 伊能大図(福井・石川県付近)・

贈間宮倫宗序

◇「伊能家のおひなさま展」

期間 2月11日(木)～3月22日(月)

展示品 伊能家に伝わるおひなさま2組

(同時期に市内各家々でもお雛様を公開)

■出版 小寺裕著『和算書「算法少女」を読む』

(安藤由紀子さんが序文の和文翻訳を担当)

お知らせ

■復元伊能大図巡回フロア展

◇小金井市 4月30日～5月3日 小金井体育館

◇松江市 6月24～27日 松江市総合体育館

◇伊予市 8月5～8日 しおさい公園体育館

◇新潟市 8月14～17日 朱鷺メッセ

◇静岡市 8月19～22日 ツインメッセ静岡

■永青文庫 ☎03・3941・0850

◇「細川サイエンス」殿様の好奇心展」

1月9日(土)～3月14日(日) 渋川春海作製

「天球儀」司馬江漢作製「地球儀」ケンペル著

「日本誌」シーボルト著「日本」などの初版本

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回

《会報》—原稿締切と発行予定—

第59号締切12月末 発行2月

第60号締切3月末 発行5月

第61号締切6月末 発行8月

第62号締切9月末 発行11月

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、事務局所在地（04年8月事務局が新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール junko-sz@jcom.home.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

（07年8月よりアドレスが変わりました）

投稿規定 会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。手書き、CD、メール添付可。（FD要相談）
一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。話題、情報、近況などのお便りもお待ちしております。

伊能忠敬研究会のホームページ

「伊能忠敬研究会」公式ホームページ

<http://inoh-tadaka.org/>（休止中）

伊能忠敬研究会「資料室」…現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊

能大図など地図および史料。（担当・坂本幹事）

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

「伊能忠敬図書館」…忠敬関係の文献、画像資料。（担当・前田）

<http://www.tt.rim.or.jp/koko>

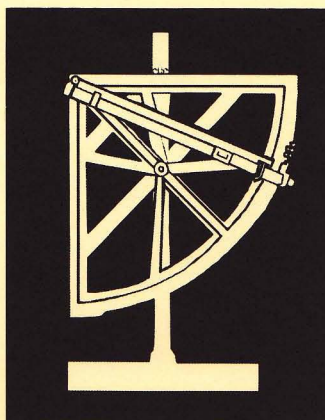
編集後記

◇九月の連休に山形県川西町にあるフレンドリープラザ内「遅筆堂文庫」を訪ねた。◇この町は作家・井上ひさしの生まれ故郷。その縁で氏の蔵書二万冊を収蔵している。◇ご厚意で書庫に入れてもらうと、「山形」行くとマジックで書かれた段ボールが積み上げてあった。大量の本が毎月届くので、整理が追い付かないのだそうだ。◇『四千万歩の男』を執筆した時の資料を見せてもらった。書棚三本分に詰まった本は驚いたことにほとんどが根本資料だった。一番驚いたのは『測量日記』を原文（毛筆）のコピーで読んでいたことである。『四千万歩の男』は一九八六年の刊行、佐久間先生の活字本『測量日記』は一九九八年の刊行、一〇年以上も井上ひさしのほうが早かったのだ。◇井上ひさしは「徹底的に調べてからでないと書けないタイプ」なのだそうで、書棚には、暦学・数学・測量学、房総の民俗など、さまざまな分野の資料が揃えてあった。あれらの本に目を通してから書いたのだとすると、「遅筆堂」井上ひさしは、全然遅筆ではない。（M）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.58 2009



TOPICS I

- Historic Spots about Inoh Tadataka (8)
- Supplement of "*The Inoh Maps*"
- Exhibition of "The Large-Scale Inoh Maps" in Saitama

Sudo Ikuo	1
Editorial Department	2
Editorial Department	4

TOPICS II

- Inoh Tadataka and Kanazawa-Hakkei
- Three Places in "Urashima Sokuryo-Zu" were Identified
- Place Names and Landscapes in "*Inoh Daizu Soran*" (12)
- Asakusa Observatory / Address of thanks to Commendation
- A Visit to Ukishimagahara Natural Park
- The Inohs as a Sake Brewer

Onuma Akira	6
Editorial Department	15
Hoshino Yoshihisa	16
Sudo Ikuo	23
Onuma Akira	24
Watanabe Ichiro	26
Inoh Yoko	28

FROM VISITORS' REGESTERS

ARTICLES

- Study of Inoh Tadataka (8)
- Kashiwagi Family Documents (4)
- Nationwide Measurement by Inoh Survey Team
- Fine Book "*Inoh Tadataka*" (2)

Ishiya Haruka	30
Kashiwagi Takao	42
Sakuma Tastuo	48
Maeda Koko	55

INOH-JUKU

- A Visit to Ohno Yasaburo's Grave

Suzuki Junko	60
--------------	----

BRANCH REPORT

- Report of Kyushu Branch
- Report of Niigata Branch

Ishikawa / Baba	62
Kakimi Soichi	64

MEETING ROOM

- Letters from Members Daily Topics and Informations

Editorial Department	65
----------------------	----

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY